

鶴岡西部地区遺跡群

助 作 遺 跡
山 田 遺 跡
発掘調査報告書

1 9 8 9

山 形 県
山形県教育委員会

鶴岡西部地区遺跡群

すけ づくり
助 作 遺 跡
やま だ
山 田 遺 跡
発掘調査報告書

平成元年3月

山 形 県
山形県教育委員会



SK21出土
罐



SD14出土
高坏

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した県営ほ場整備事業「鶴岡西部地区」にかかる助作遺跡・山田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの調査は昨年度の矢馳A・B遺跡・清水新田遺跡に引き続いて行われた鶴岡西部地区関係の第二年次分として実施されたものであり、これまで不鮮明であった当該地域の古墳時代や平安時代などの内容理解にとって貴重な資料を追加、提供するものと期待されるところです。

近年、急速で広範になされる諸開発事業の進展は埋蔵文化財の保存や保護とのかかわりにおいても困難な問題を多く抱える所となってきておりますが、「県民福祉の向上」、「こころ広くたくましい県民の育成」とする基本的な立場から調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保護とその活用を計ってまいる所存です。

最後になりましたが、本調査に御協力いただいた赤川土地改良事務所・青龍寺川土地改良区・大泉土地改良区・鶴岡市教育委員会および調査に従事された地元の方々に対しころより感謝の意を表しますとともに、本書が地域の歴史を解明する上で基礎的な資料として活用していただければ幸いと存じます。

平成元年3月

山形県教育委員会

教育長 木場清耕

例　　言

1. 本報告書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて昭和63年度に実施した「県営ほ場整備事業鶴岡西部地区」に係る鶴岡西部地区遺跡群（助作遺跡・山田遺跡）の発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・調査体制等は以下の通りである。

助作遺跡（A T O S Z - II）遺跡番号1652（山形県遺跡地図）

所在地 山形県鶴岡市大字矢馳字上矢馳266番地他

現地調査 昭和63年8月22日～昭和63年9月22日（延べ32日）

山田遺跡（A T O Y D）遺跡番号2031（山形県遺跡地図）

所在地 山形県鶴岡市大字山田字油田89番地他

現地調査 昭和63年8月29日～昭和63年9月8日（延べ9日）

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者（主任調査員）佐々木洋治（同左）野尻侃（現場主任）阿部明彦
(調査員)吉田洋一

事務局（事務局長）後藤茂弥（事務局長補佐）土門紹穂

(事務局員)佐藤大治 長谷部恵子 長谷川浩 高橋春雄

4. 本報告書に収録した遺構の縮尺は1/100・1/200を基本とし、それぞれにスケールを付した。遺物は助作遺跡出土の土師器が1/4、山田遺跡のそれが1/3である。また挿図及び本文中で用いた略記号は、S T：住居跡、S K：土壙、S D：溝跡、E：遺構の構成因子（E D：周溝、E P：柱穴等）、S X：性格不明遺構、R P：土器・土製品、R Q：石器・石製品等を表している。

5. 本書中の遺構平画図、遺物実測図の表示基準は概ね以下の通りである。

(1)遺構平面図中の方位は真北を示す。(2)遺物実測図の断面白抜きは土師器、黒ベタは須恵器、土師器内面右側スクリーンは内面黒色処理（内黒）を各表している。

6. 本報告書の作成は阿部明彦、吉田洋一の2名が担当し、漆山順子、小林延子、沢田恵美子、渡部由美子、石坂征子、秋山智子、三沢友子が補佐した。

7. 本文の執筆はII章・IV章1～4を吉田が、その他を阿部が各分担した。また編集は阿部がその任に当たり、全体を佐々木洋治が総括している。

8. 本書の作成に当たって以下の方々より御指導を賜った。銘記して御礼を申し上げる。
柴垣勇夫、斎藤孝正、吉岡康暢、宇野隆夫、酒井忠一、川崎利夫（順不同・敬称略）

目 次

卷頭図版・序

I 調査の経緯	4 遺構	6
1 調査に至る経過	5 遺物	12
2 調査の経過	6 まとめ	19
II 遺跡群の立地と環境	IV 山田遺跡	
1 歴史的環境	1 調査の概要	20
2 地理的環境	2 遺跡の層序	21
III 助作遺跡	3 遺構と遺物の分布	21
1 調査の概要	4 遺構	22
2 遺跡の層序	5 遺物	26
3 遺構と遺物の分布	6 まとめ	28

挿図目次

第1図 遺跡位置図	第7図 溝跡(2)	第13図 調査概要図
第2図 遺跡概要図	第8図 土師器分類・集成図	第14図 土層柱状図
第3図 土層柱状図	第9図 出土遺物(1)	第15図 遺構配置図
第4図 遺構配置図	第10図 出土遺物(2)	第16図 遺構平面図
第5図 住居跡	第11図 出土遺物(3)	第17図 出土遺物
第6図 土壙・溝跡(1)	第12図 出土遺物(4)	

図版目次

助作遺跡

図版1 航空写真・調査区全景	図版8 出土遺物(4)
図版2 A～Hトレンチ	
図版3 S K21・25土壙、S D24溝跡	山田遺跡
図版4 各検出遺構・遺物出土状況	図版1 Aトレンチの遺構・検出状況
図版5 出土遺物(1)	図版2 Bトレンチの遺構・検出状況
図版6 出土遺物(2)	図版3 Cトレンチの遺構・検出状況
図版7 出土遺物(3)	図版4 出土遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

鶴岡市の西部に位置する大泉地区には古墳時代に関連する幾つかの集落遺跡が以前から知られてきている。すなわち、矢馳A遺跡・清水新田遺跡・助作遺跡などである。しかし、遺跡発見のきっかけがいずれも昭和31年頃に行われた暗渠管の埋設等工事によるものであったことから、内容的には遺物群の単発的発見に止どまり¹⁾、遺構その他についての具体的な内容の知見はつい最近まで待たなければならなかつた。

一方、これらは研究史的に見て鶴岡市菱津字火打崎所在の「菱津古墳」とのかかわりから注目された遺跡群として記憶され、いずれも古墳時代の庄内を考える上では欠くことができない中核的位置を占めるものと考えられる。

このような状況の下、昭和62年度から当該遺跡群を含む地域一帯に、県営は場整備事業「鶴岡西部地区」が実施されることとなり、計画区域内に矢馳A・B遺跡、清水新田遺跡、助作遺跡、山田遺跡等周知の遺跡群が含まれると予想された。そのため昭和61年度にこれらの試掘調査（分布調査B）を行って規模・内容等の確認を行ったところ、昭和62年度施工予定地区に矢馳A・B遺跡、清水新田遺跡の3遺跡、昭和62年度に助作遺跡、山田遺跡の2遺跡がそれぞれ含まれ、施工方法の変更を行っても破壊を免れない部分が出ること等が明らかとなつた。これらを下に県農林部外の関係機関と調整を重ねた所、止むを得ず壊れる部分、および改変の度合いが大きいと考えられる部分を限定的に調査の対象とする緊急発掘調査を実施することで合意し、昭和62年度に矢馳A・B遺跡、清水新田遺跡の3遺跡、続く二年次の今年度は助作遺跡、山田遺跡の2遺跡について発掘調査を実施する運びとなったものである。なお、ほ場整備に平行して助作遺跡内に係る国道7号線のバイパス工事も同時に進められることとなり、この部分を対象とした緊急発掘調査を助作遺跡の第一次調査として昭和63年7月1日～同年10月12日までの間で実施している。

2 調査の経過

調査は先に述べた現状保存の前提から対象域を極力部分に限定したため、結果的に期間及び面積共極く限られたものなものとなっている。すなわち、両遺跡共に用排水跡部分を中心とした調査に止どめ、幅2～3m、長さがおよそ遺跡範囲に係る部分とするやや変則的なトレンチ方式での調査実施となっている。助作遺跡では排水路や用水パイプの埋設予定地にA～Hの各トレンチを設定し、部分的ながら住居跡・土壙・溝跡等の遺構とこれにかかる土師器他の遺物が検出された。山田遺跡でも同様に幅3m～4mのA～Cトレンチを設定して調査を実施している。調査の結果は後に述べるが、Cトレンチを中心として主として平安時代の遺構と遺物が検出された。

1) 川崎利夫 1972「庄内平野の土師式土器—鶴岡市矢馳遺跡出土の土師式土器を中心として—」『庄内考古学』第11号 庄内考古学研究会

II 遺跡群の立地と環境

I 歴史的環境

助作遺跡と山田遺跡の立地する鶴岡西部地区は、昨年度に県営ほ場整備事業の進展に伴って発掘調査が実施された矢馳A遺跡や清水新田遺跡、さらには現在迄に確認された中では庄内地方唯一とされる菱津古墳等、古墳時代の遺跡が集中して存在する地域として知られている。庄内地方において確認されている古墳時代の遺跡は極めて少なく、断片的な遺物の出土のみで内容の不詳なものを含めても10箇所余りを数えるのみである。その中にあって、鶴岡市の西部に広がるこの遺跡群は、内容、密度共に他と一線を画しており、庄内地方の古墳時代を考える上では欠くことのできない中核的存在と言えよう。

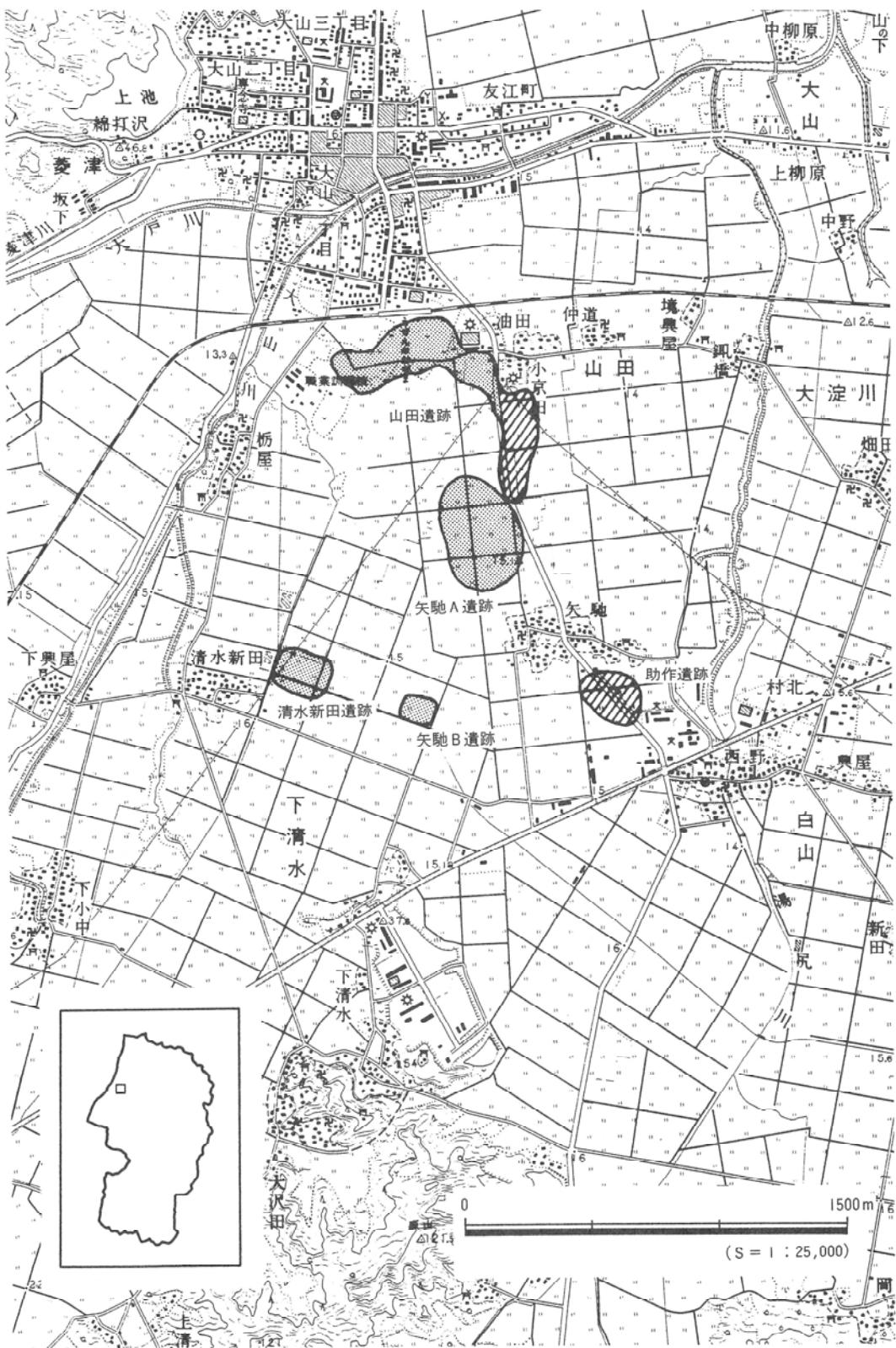
近年、酒田市の関B遺跡や南興野遺跡等から古墳時代の遺物が発見され注目を集めるところがあった。これは最上川以北・飽海郡域にも古墳時代の集落が存在した可能性を示唆するものであるが、遺構を伴わない遺物の断片的な出土のみに止まっており、集落跡の存在を決定づける確認を欠いているのが現状である。

庄内地方の古墳時代の遺跡が最上川南部の田川郡域、とりわけ今回調査が行われた鶴岡市西部等庄内平野南辺部に集中しているという事実は、古墳時代の庄内地方を考える上で非常に示唆的なことと捉えることができる。即ち昨年度以来の調査によって確認された大小の集落、及び集落との関連において象徴的な菱津古墳の存在は、田川郡域が質的な意味での『日本海沿岸地域における古墳文化の分布的北限』とする従来の見識を、少なからず補強するものと考え得るからである。

2 地理的環境

鶴岡西部地区遺跡群は鶴岡市街地の西方約5kmに位置している。現在の地目は主に水田で、標高は助作遺跡で約15m、山田遺跡では約14mを測る。

遺跡の立地する一帯は、現在では水田耕作等の影響でほとんど平坦化されているものの、かつては北流する大山川・湯尻川両河川の流路変遷に伴って形成された微高地や低湿地がより明確な形で存在し、起伏に富んだ地形を呈していたと推定される。微高地の分布は空中写真における階調の差異によって概ね捉えることが可能であるが、遺跡範囲は微高地の分布とよく対応しており、当時の集落が微高地上に形成されていた様子が確認できる。また、昨年度調査が実施された清水新田遺跡や今年度の山田遺跡では、中心となる古墳時代の遺構・遺物の集中地点と歴史時代のそれとの間に隔りがみられるが、これは集落が営まれた微高地の形成時期の相異によると考えられ、微高地の形成と共に集落が移動若しくは拡大していったものと推定される。

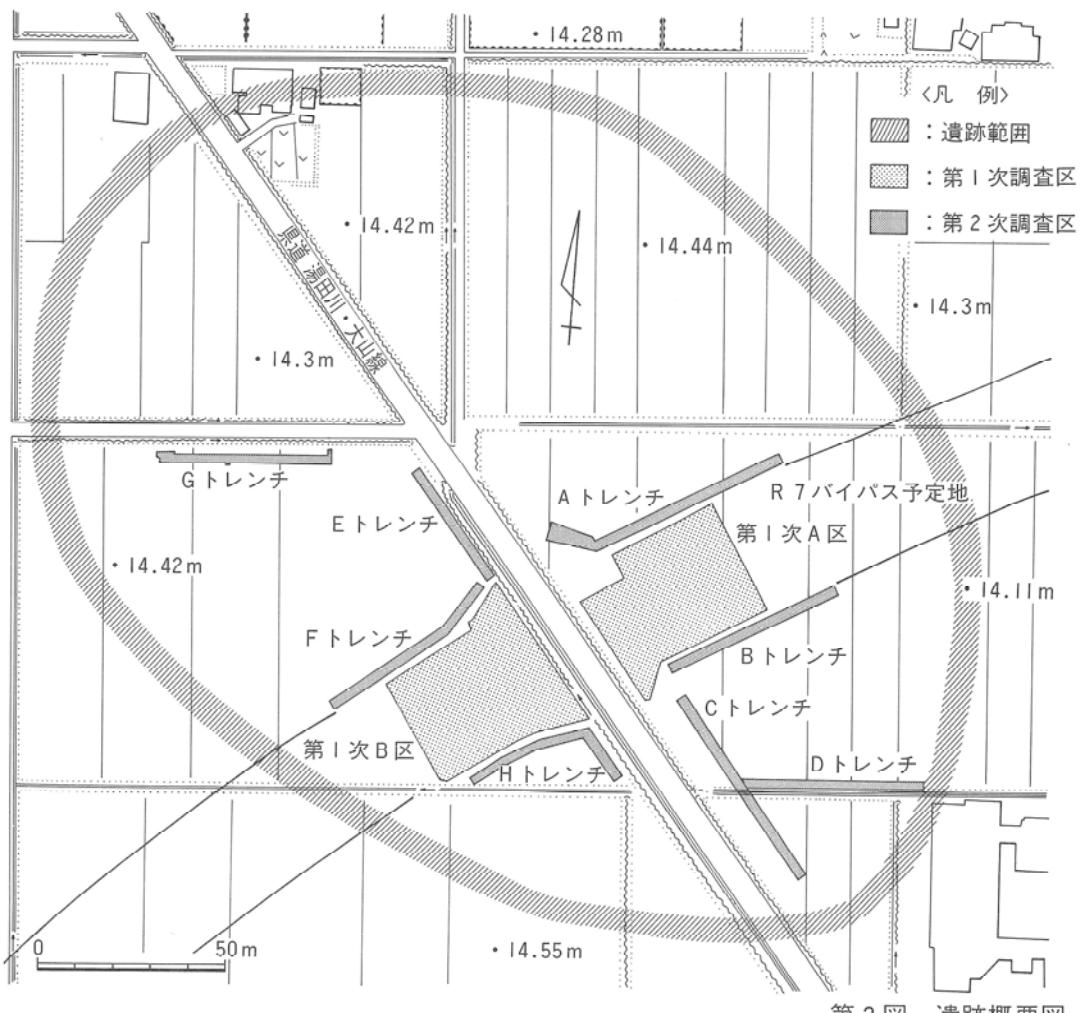


第1図 遺跡位置図

III 助作遺跡

I 調査の概要

調査は前年度に実施した試掘調査の結果²⁾および、ほ場整備実施計画や施工方法等に照らして、特に破壊される恐れが強い部分を限定的に対象とした。従って、掘削の深くなる用・排水路予定地、また、遺跡内を東西に横切る国道7号線「鶴岡バイパス」用地、路線に沿う排水路等が主要な対象地区となっている。該当部分には、県道を挟む東側にA～D、同じく西側にE～Gと名付けた計8本のトレンチを設定し、原則的に工事にかかる掘削幅から排水路で3m、用水路で2m幅のトレンチとした（第2図）。調査の結果、A・Bトレンチで住居跡・土壙・溝跡等が検出されたが、C・Dトレンチでは遺構・遺物共に殆ど見られなかった。また、西側のF・Hトレンチでは畦畔状溝跡群、Gトレンチで多量の遺物を含む大形土壙・性格不明の竪穴他を検出し、各々精査記録を行って調査を終了した。



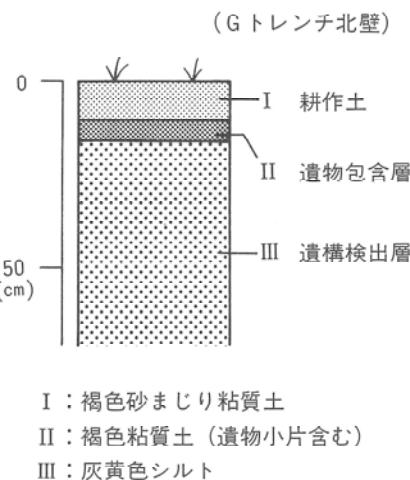
2) 山形県教育委員会 1988「分布調査報告書(15)」

2 遺跡の層序

遺跡が立地する区域での基本的な層序は、概ね右の第3図に示す通りである。すなわちI層：褐色砂混じり粘質土（耕作土）、II層：褐色粘質土、III層：灰黄色シルトであり、遺物はII層下面から3層との界面にかけて検出された。また、遺構の検出面はIII層上面であったが、一部の古墳時代に帰属する遺構では殆どIII層と覆土との識別が困難なものがあり、かろうじて暗渠等の搅乱による下部土層の浮上や僅かに見える炭化物の分布から遺構の存在が捉えられた事例が幾つかあった。例えば、多量の遺物が検出されたSK21土壙は前者であり、僅かながら炭化物の面的な広がりを認めたST5が後者である。こうした状況は近隣の矢馳A遺跡や清水新田遺跡でも顕著に認められた現象で、既に矢馳A遺跡他の報告³⁾で言及されたが、集落の立地する微高地の形成と遺構を埋積した土砂との関係が基本的に同質であることに因る結果と考えられる。氾濫が集落を襲い埋積されても村を再興した人々の営みが推測される。

3 遺構と遺物の分布

今次調査は言わば水路対応のトレンチ調査であったため、各トレンチで検出された遺構・遺物の大半はごく限られたものとなっている。しかし、同時に平行して調査された国道7号線バイパス敷地内の様子から、これらトレンチにおける遺構の在り方が無理なく了解され、かつ性格的位置付けもおおよそ可能と考えられた。すなわち、第1次調査のA区に隣接するF・Hトレンチでは主として畑作に関連すると捉えられる規格的で細長の畝状溝跡群が検出され、A区のそれと一致している。但し、FとHのトレンチ間では幾分かの違いが認められ、Hトレンチでは下層に遺物の集積するSX20の存在が認められた事を除けば、畝状遺構が単純でかつ整然としていた。一方、Fトレンチでは畝状の溝跡がやや不規則で々々に切り合う溝跡や土壙および遺物が散見され、地点間の構築時期の差や機能・性格的相異他が想起される。同様に、B区に隣接するA・Bトレンチでは不明瞭ながら住居跡が主体となる遺構の分布が認められ、AトレンチではST8、BトレンチでST3～5住居跡等が各検出された。B区との様相に大きな開きがある点で注目される。なお、地点的に隔たるGトレンチでは、B区SD98の延長上にSD24、SK21他のまとまりある遺構があり、須恵器を含む多量の遺物が出土している。これは集落が第1次調査のA・B区域を一つの中心域とし、さらに北西方への広がりを持つ一端を示すと捉えるのが妥当であろう。



第3図 土層柱状図

3) 阿部明彦他 1988「鶴岡西部地区遺跡群矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書」県埋文報127集 山形県教育委員会

4 遺構

a) 住居跡

住居跡はAトレンチでS T 8及び不明瞭な1棟の計2棟、BトレンチでS T 3・4・5までの3棟が検出された。なお、S T 4では重複が認められたが、遺構の遺存状態や土層のグライ化等から先後関係他の詳細が不明である。また、検出された住居跡はいずれもトレンチ外に主体を有する部分的なもので、プランその他の詳細が把握できるまでのものは得られなかった。以下にこれら住居跡の概要を記す。

S T 3：東辺に10cm前後の幅で南北方向に走る炭化物層の帶があり、住居東辺と考えられた。東西規模6.9m程の住居跡と考えられるがその他不明である。遺物は検出面から15cm位までのレベルに出土し、上部に持ち込まれたと思われる花崗岩の円礫数点が認められた。

S T 4：部分的な炭化物の立ち上がりから検出できた住居跡で、重複等から南東隅の一角が捉えられただけに止まっている。炭化物の底面にやや古相を示すと考えられる壊の完形品が出土し（第9図2・5）、他の覆土中出土遺物とは時期差があると捉えられる。

S T 5：III層上面で住居北辺部分のプランが微かに捉えられた住居跡で、東西規模6m程と推定できるが西辺は暗渠に係り不明である。また、遺物の出土は無く内部施設も不明であるが、東半部の床面と推定された部分に炭化物の広がりと円礫等の分布が認められた。

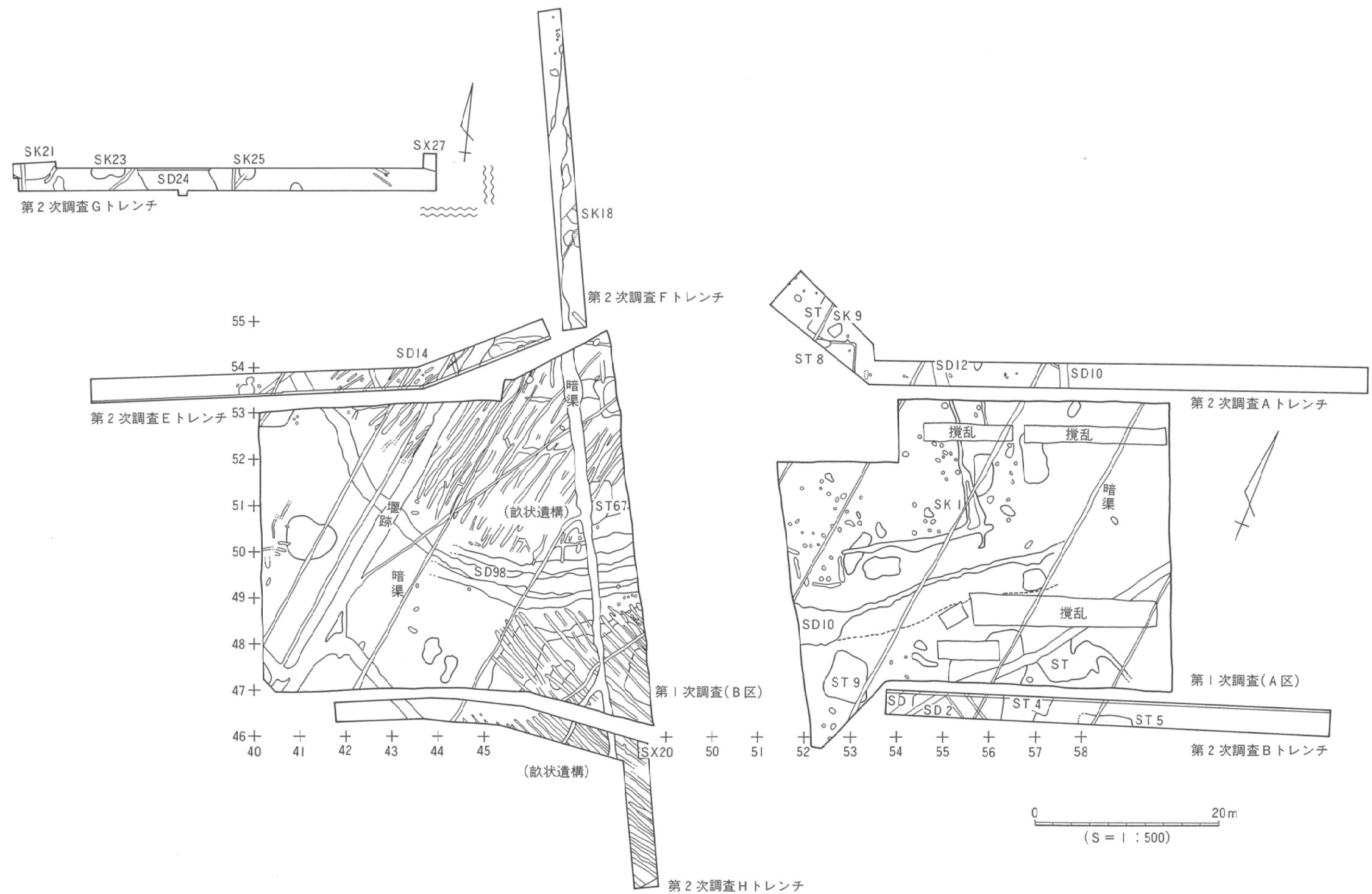
S T 6：幅20cm、深さ15cm内外の周溝（E D 2）が矩形に巡る住居跡で、プランの約半分弱が検出された。平面形・規模は不明確ながら住居北辺の長さ等から約4.5m内外と推測できる。内部には関連する柱穴（E P 1）と土壙（E K 3）が認められたが、カマドは不明であった。遺物は周溝や土壙内の覆土から土師器壊他の破片若干が出土しただけである。

b) 土 壤

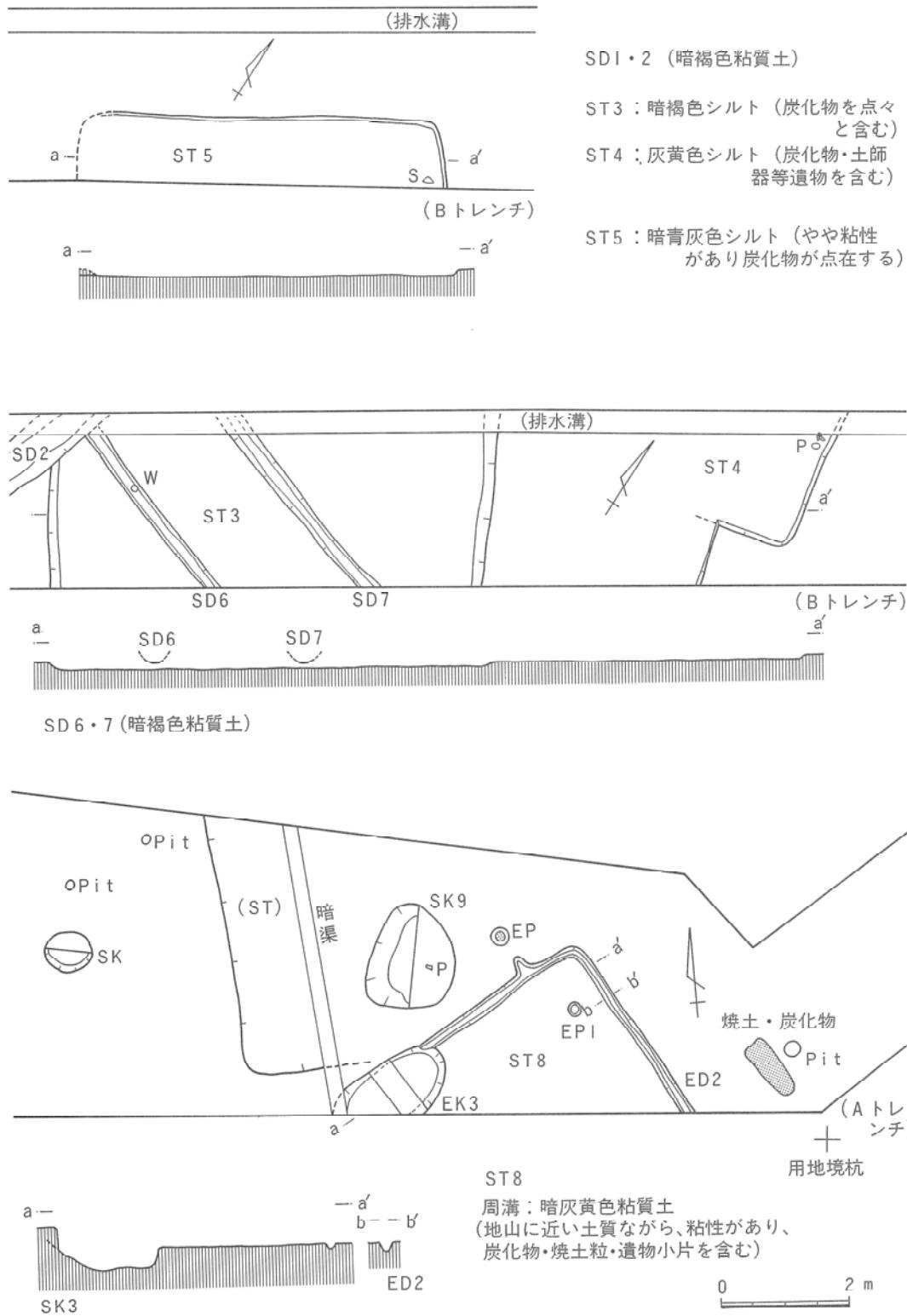
土壙はAトレンチで1基、E・Fトレンチで各3基、Gトレンチで4基、計8基が検出された。形態的には径が2m未満で略円形や楕円形を呈す全体に浅めのS K 9・17・18、S K 15・25他と、径5m以上と大形で深いS K 21等に大別でき、前者が主体であった。この内、まとまった遺物を含むものにS K 21・23・25の3土壙があり、S K 21からは覆土2層を中心として多量の土師器各器種と完形の須恵器壊他が出土している（第6図）。

c) 溝 跡

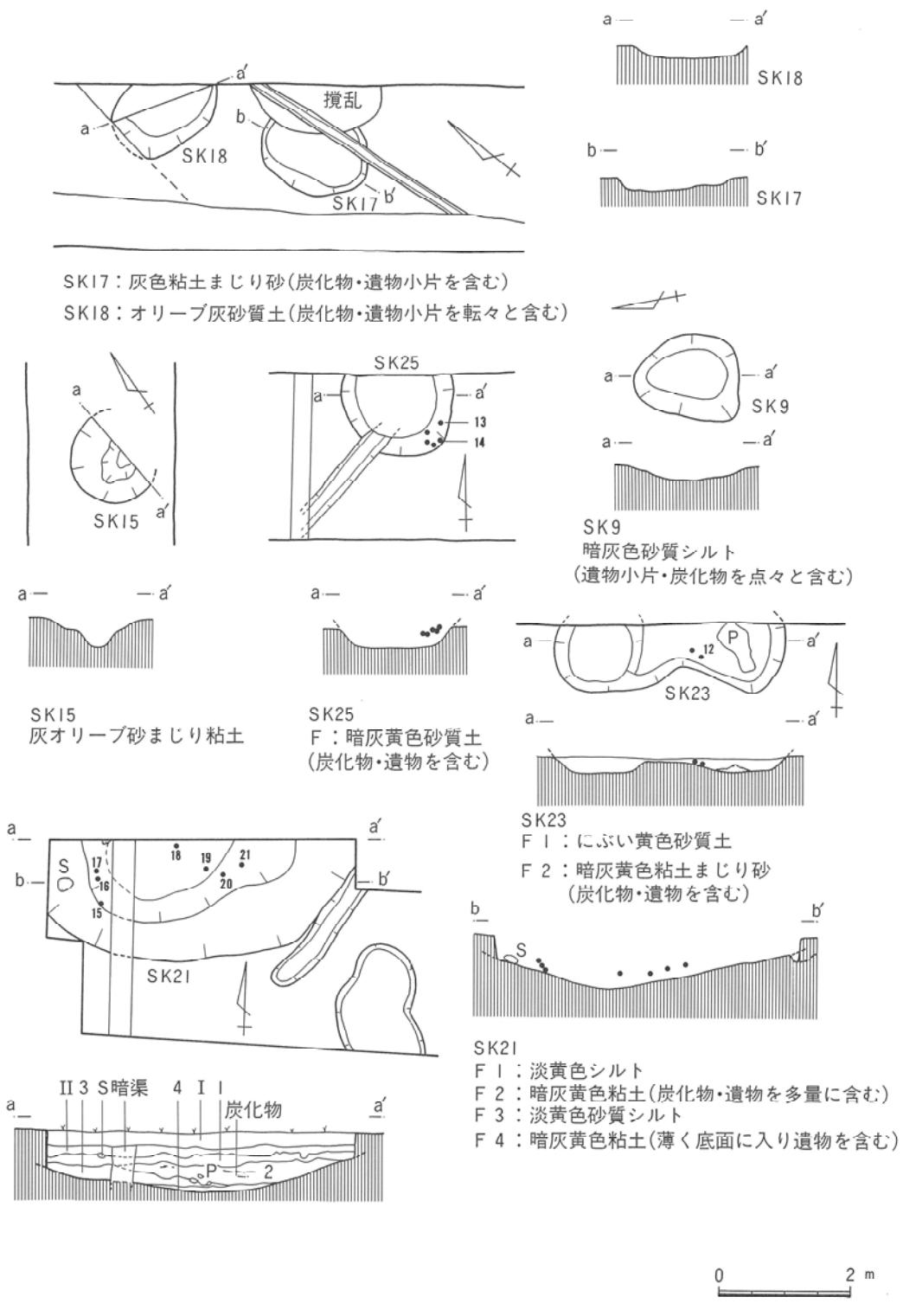
近世以降のものを除き古墳時代の所産とできる溝跡に限ればAトレンチでS D 10・12の2条、Fトレンチで畝状の溝跡を含むS D 14他の16条、GトレンチでS D 24他の6条、また、Hトレンチでは幅30~80cm、深さ15cm内外ではば等間隔かつ直線的に南東から北西方に走る畝状の溝跡16条程が整然と検出された。この畝状溝の覆土は遺構検出面のIII層に非常に近い暗灰黄色シルトで、炭化物が点々と見られる他は土器等遺物を殆ど含んでいない。



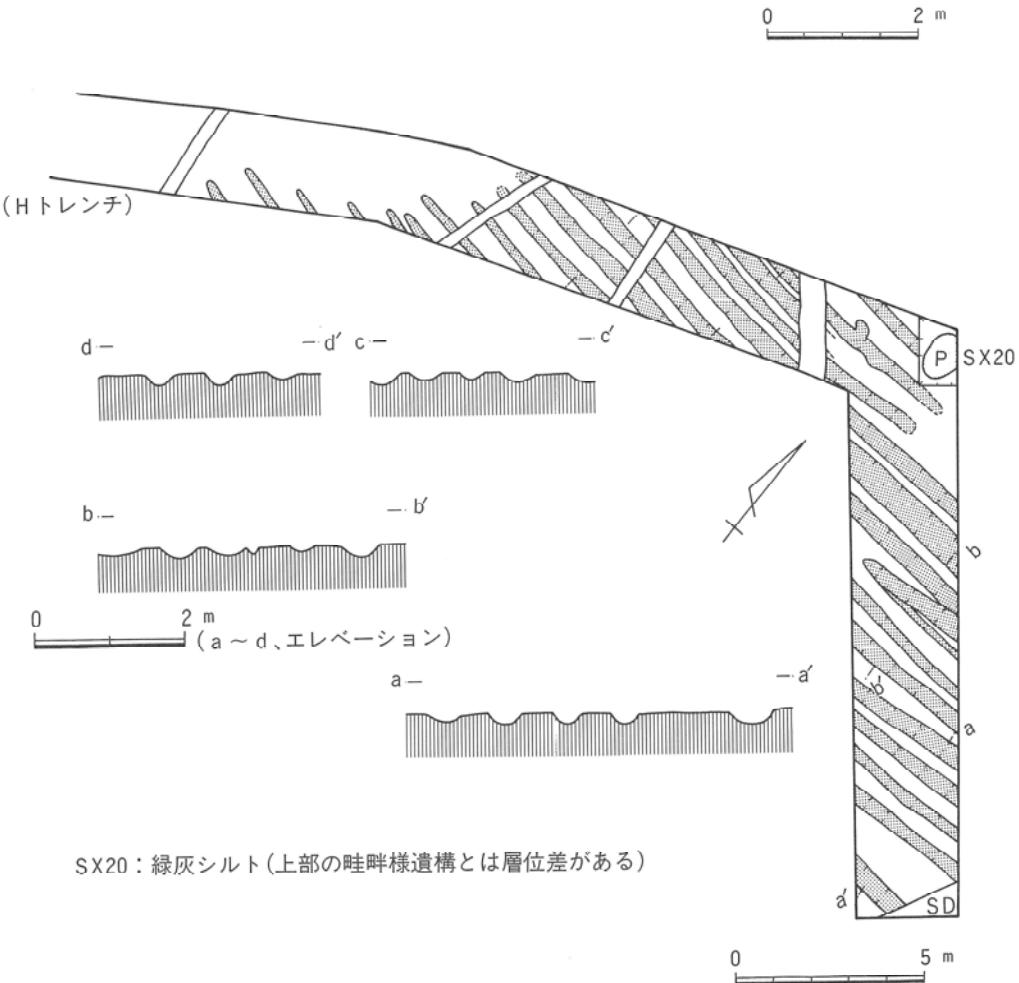
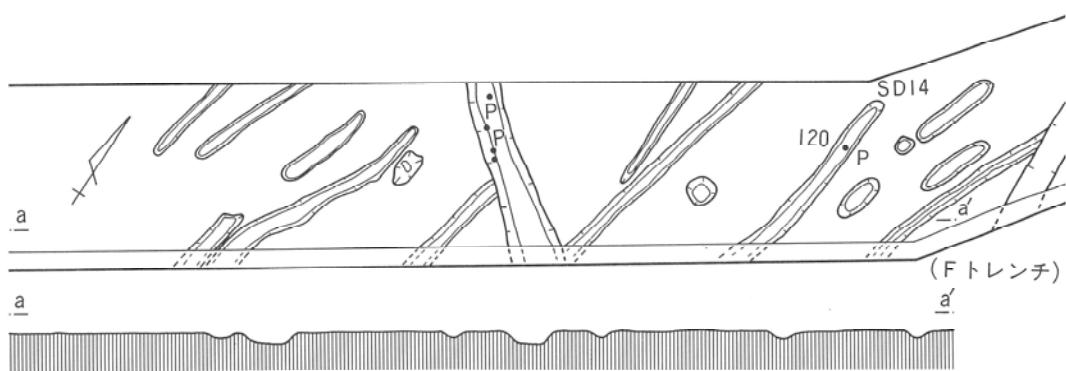
第4図 遺構配置図



第5図 住居跡



第6図 土壌・溝跡（Ⅰ）



第7図 溝跡 (2)

5 遺 物

a) 土師器

本遺跡からは壺・高壺・鉢・甕・瓶等の土師器各器種が出土した。これらは形態的特徴や法量、あるいは技法的特徴等から幾つかに細分して捉えることのできる様相（型式）が窮われ、また出土遺構での在り方から、其伴の状況（組成）あるいは多少の年代差と捉えられる差異等も認められた。以下では各器種毎の形態と技法等の違いから類別して概略を記し、後に組成・型式・年代他について述べることとする。

壺（A）は大方が内黒形態のもので占められており、非内黒形態のものが存在するとしても、極く僅かと推察される。すなわち、明らかに非内黒形態と判断できたもの、あるいは復元までに至り形態他が把握できるたものは皆無に近い状況であったからである。

I類：浅身の丸底形態で、口縁は体部との間に段を成して短く外反する。口唇は外側にめくるように整形されて玉縁となる。外面の調整は口縁部でヨコナデ、体部でアタリ単位の大きなヘラミガキである。内面は口縁部で横方向のヘラミガキ、体部から底部にかけては放射状の丁寧なヘラミガキが充填される（第9図10）。

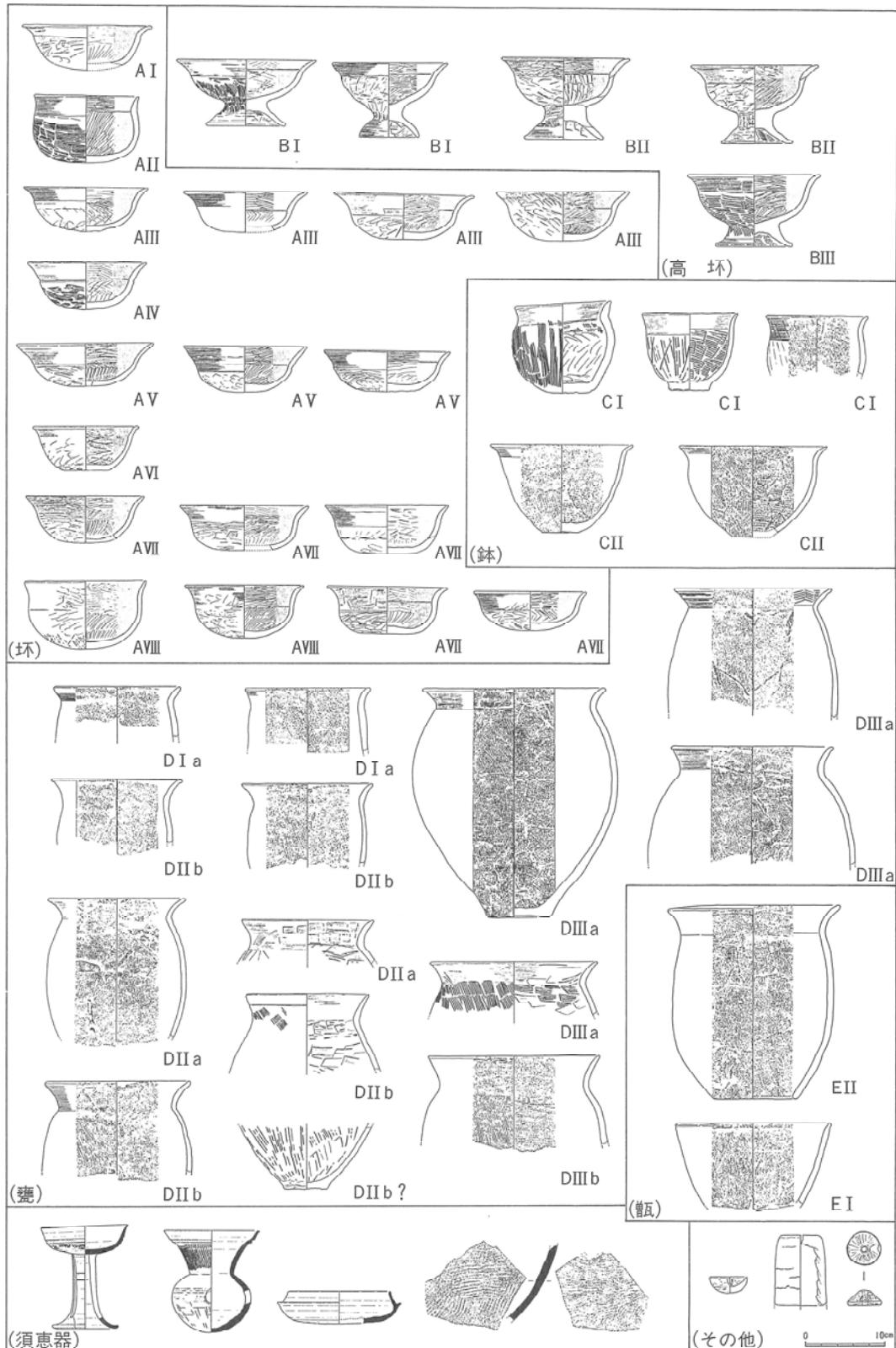
II類：「U」字状となる深身の丸底形態を呈し、短く外傾して開く口縁部では幾分締まる頸部の内面が肥厚して稜を成す。外面の調整は、口縁部でヨコナデ、体・底部にかけては横方向のハケメが施される。内面は、口縁部で横方向のヘラミガキ、体部から底部で斜方向のヘラミガキ充填である（第11図52）。

III類：外面に際だった段等が見られず、丸底で浅身の体・底部から口縁が緩くやや長めに外反する形態的特徴を持つ。また内面の体部と口縁部の境には、明瞭な稜線が認められ、口縁部分が体部より幾分厚めとなる。調整は、外面でヨコナデとケズリ（第9図9）、あるいは粗い斜方向のヘラミガキ（第11図43）、内面では口縁部で横方向、体部で斜方向のヘラミガキ充填となる。

IV類：口縁が体部で一旦弱くくびれてから外反気味に開く全体に浅身の丸底形態で、体部と口縁部との境に一条の明瞭な沈線が周巡する。調整は外面でヨコナデとハケメ、内面で横、斜方向のヘラミガキ充填である（第9図8）。

V類：浅身の丸底形態で、体部上半に形成される強めの段や、長めで大振りに外傾する口縁等に特徴が見られる。調整は外面の口縁でヨコナデ、体部でヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキや放射状のヘラミガキ充填である（第9図3、第10図35・第11図49）。

VI類：平底風の底部から内湾して立つ深身の体部、幾分内側に肥厚して外反する口縁部等に特徴がある。また、口唇端部は短く強くめくれて玉縁となる。調整は外面でヘラナデ、内面の体部で横方向、底部で平行充填とするヘラミガキである（第9図4）。



第8図 土師器分類・集成図

VII類：量的なまとまりがなく、一括的に扱ったことから個体間の差が大きいが、概略は浅身の平底で、口縁部外反、体部内湾で直上気味に短く立ち上がる形態等に概括できる。調整は外面でヨコナデとヘラミガキ・ヘラナデ、内面で横・平行・放射状などのヘラミガキ充填である（第9図2・5、第10図27・28）。

VIII類：深身の丸底で、やや長めの口縁が外反する。形態的には先のII類に近いが、体部の立ち上がりや調整その他でVII類に共通する。調整は外面でヘラケズリ→ヘラミガキ・ヨコナデが認められ、内面は横・斜方向のヘラミガキ充填である（第10図26、第11図51）。高坏（B）は形態や手法的特徴から以下にのべる三類に細別でき、いずれも内黒である。

I類：浅身の坏部、大きく開く口縁部等に形態的特徴を持つ。脚部は短い脚柱を持ち、湾曲して丸みを有するもの、短く直線的に開くもの等の別がある。調整では外面の口縁部でヨコナデ、坏部でハケメやヘラナデ、脚部でヨコナデであり（第9図11、第11図56）、内面は口縁部で横・平行、体部で斜方向のヘラミガキが施される。

II類：坏VII類に近似の坏部を持ち、湾曲が強くやや深身の体部から肥厚した口縁が外反する形態で、内面の体部と口縁部との境に稜状となる段が周巡する。外面の調整は口縁でヨコナデやヘラナデ、体部でヘラケズリとその後のヘラナデやナデとなる。脚部は短い柱実部から外傾して開く形態で、ヨコナデやヘラナデ調整が施される（第11図40・41）。

III類：深身で大振りな丸底の坏部と、口縁部が幾分体部からくびれて外反する形態を持つもので、調整は外面の口縁部でヨコナデ、体部で横方向のハケメ、内面の口縁部で横方向のヘラミガキ、体部で斜方向のヘラミガキ等である（第9図12）。

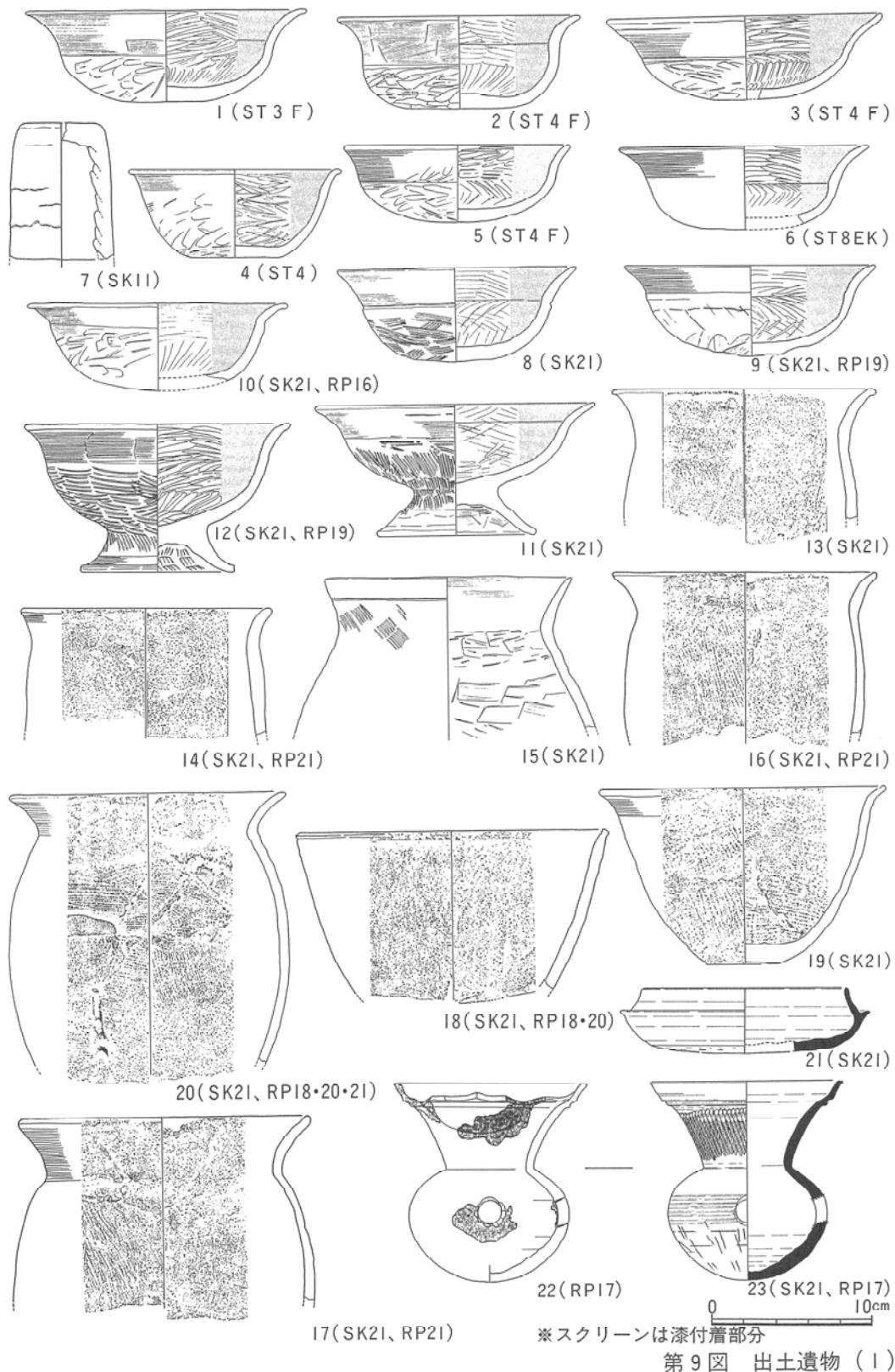
鉢（C）は形態と法量等から見て大別2種の在り様が窺え、さらに手法その他から細別可能と推察できたが、全体的な固体数が少ないと前の大別に止どめて記す。

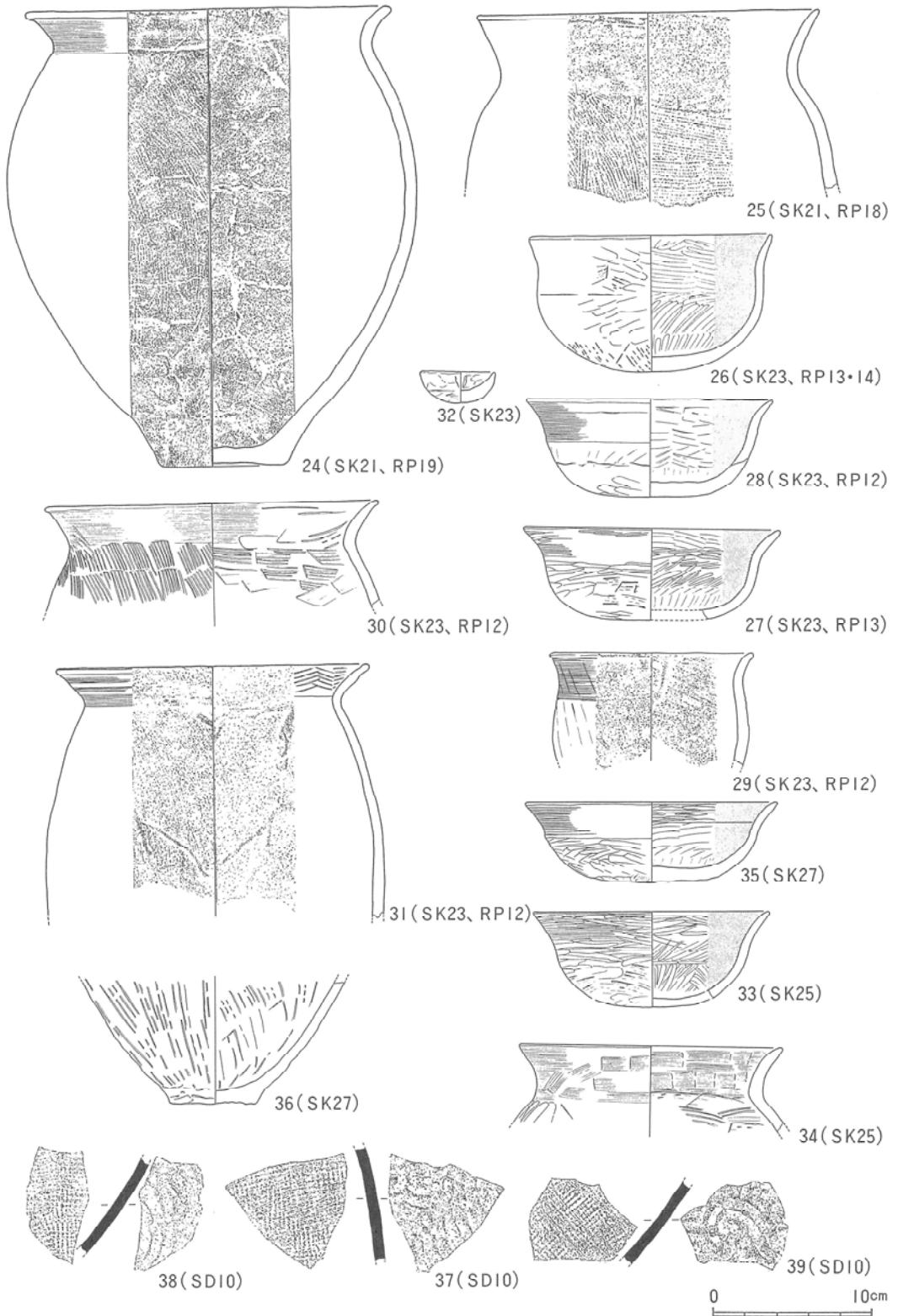
I類：法量的に小さな一群を一括する。形態的には平底から弱い湾曲で急傾して立ち上がる体部と幾分締まる頸部、直上気味で短かめに外反する口縁部等より成ると概括できる。調整は、口縁部の内外面でヨコナデ、体部の外面で縦・斜方向のハケメないしヘラナデであり、内面は横・斜方向のハケメやナデが施される（第10図29、第11図50・53）。

II類：小径の平底から強い湾曲で緩く大振りに立ち上がる体部と、頸部でくびれ短く外反する口縁部とから成る法量の大きな形態を一括する。調整は口縁部でヨコナデの顯著なものが目に付き、体部内外面ではハケメ整形が卓越している（第9図19、第11図46）。

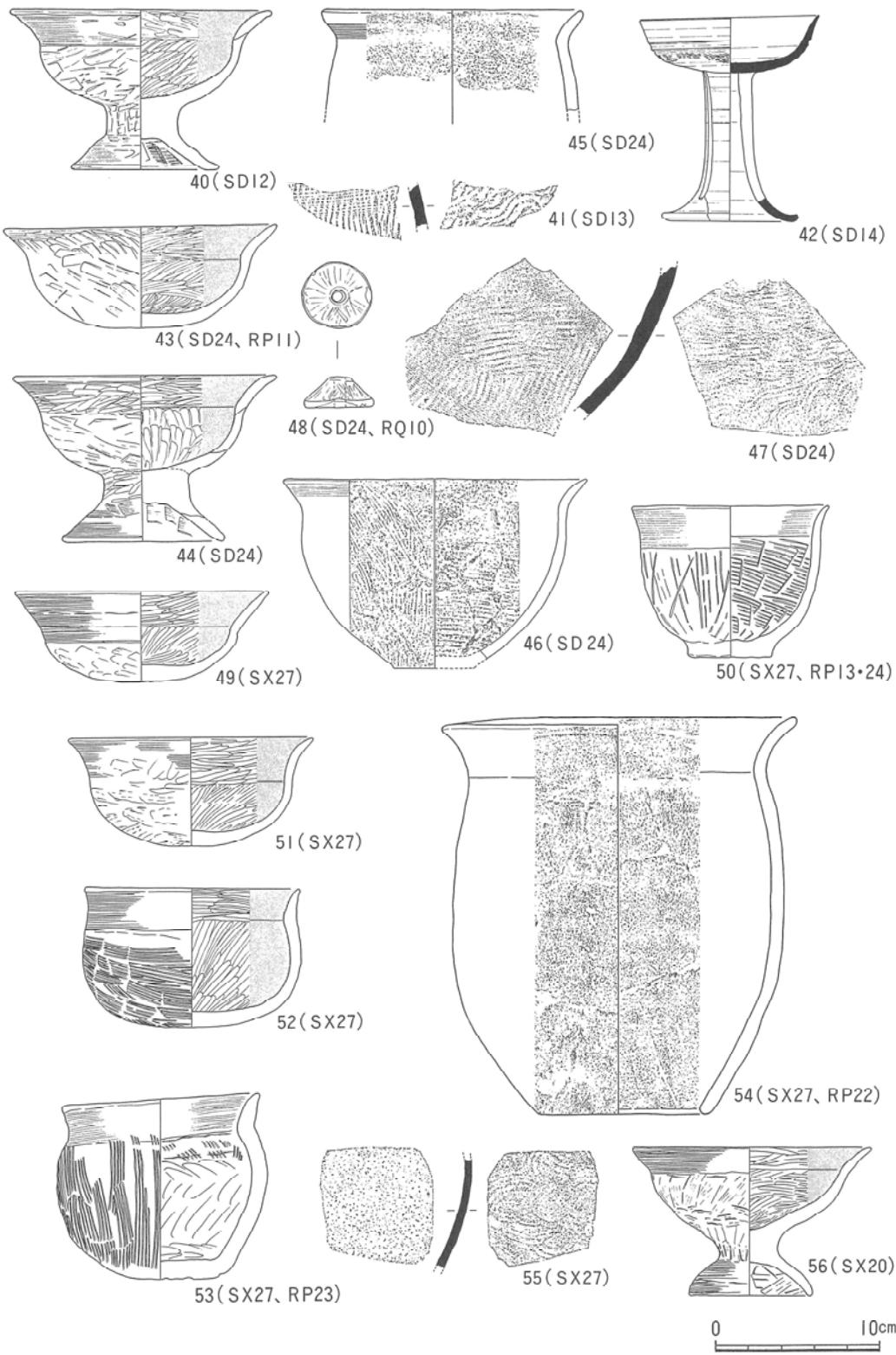
甕（D）は法量的大中小から大別三種の在りようが認められ、さらに形態的特徴や調整手法等技法から細分できる。

I類：法量的に最小の一群で、体部の張りが少ない形態をとる。口縁部の形態的特徴から短く外反・外傾する口縁部を持つ（a類）（第9図14、第11図45）と長く伸び出し端部

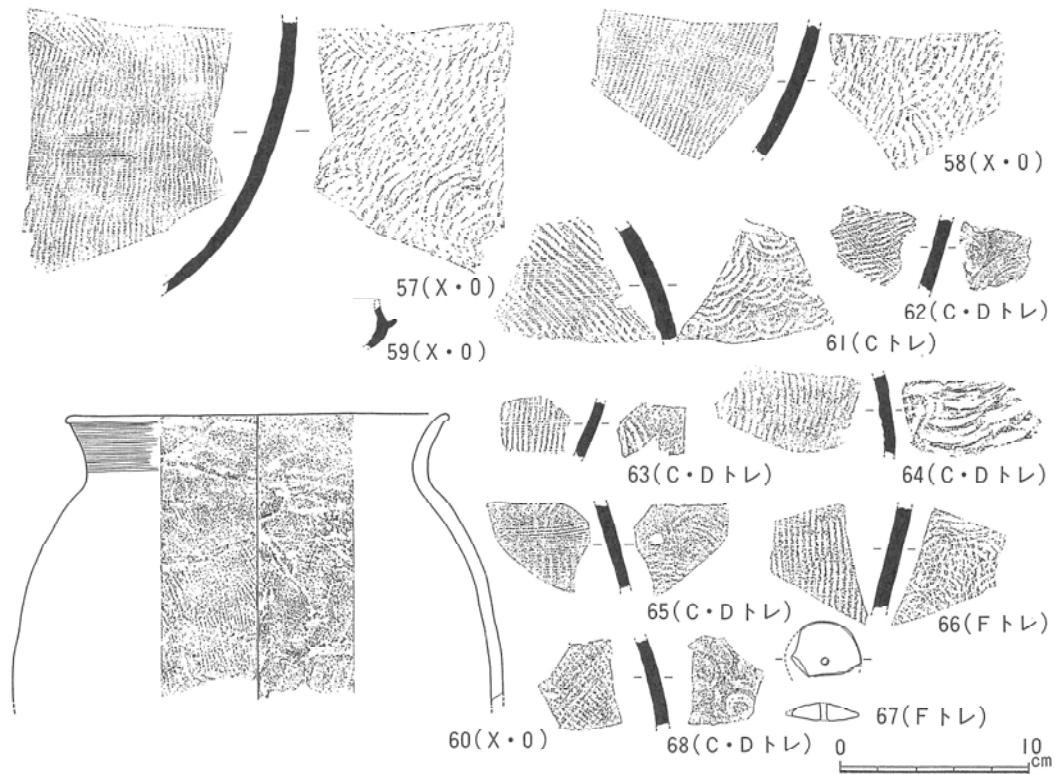




第10図 出土遺物（2）



第II図 出土遺物 (3)



第12図 出土遺物（4）

が玉縁等に整形される（b類）（第9図13・16）に細分できる。調整は例外なく口縁部でヨコナデ、体部外面で縦ないし斜方向のハケメ、内面で横や斜方向のハケメとなる。

II類：I類に次ぐ中程度の法量を持つ一群で、体部の張りがやや大きい形態のものが主体となる。口縁部の作り出しから、比較的短い口縁部を持つ（a類）（第9図20、第10図34）と長目に引き出される（b類）（第9図17）とに細分される。調整はI類に同等と捉えられるが、a類の一部で体部外面に粗いヘラミガキ風のナデが施されるものがあり（第10図34）古相を遺すと推察される。なお、本類はI・III類程の量的まとまりがない。

III類：法量的に最大となる一群で、体部がやや強く張る形態を呈す。I・II類同様口縁部の在り方から、短く外傾して端部が玉縁となる（a類）（第10図24・30・31）と長目に伸びる（b類）（第10図25）に細分されるが量的主体はa類にある。調整は口縁部でヨコナデ、体部がハケメであり、先のI・II類に変わることろがない。

甌（E）は検出できた固体が少ないものの、鉢状の形態で単孔を持つと考えられる小形の形態と、甌形をとり大形で無底式形態の二種を認める。

I類：内湾する体部からそのまま伸び出して開く口縁を持つ鉢形の形態で、口縁端が角ばった整形を受ける。底部は欠矢のため形状不明であるが、恐らく単孔であろう。調整は内外面共にやや粗いヘラナデ風のミガキが施される（第9図18）。

II類：甕 I b 類に似た形態ながら法量的にはIII類に近い無底式の大形のものである。調整は内外面共にあたり単位の大きなヘラミガキであり、器面を潰して緻密に仕上げる丁寧な仕様が窺える（第11図54）。

b) 須恵器・その他

須恵器は破片資料を主とする約50点程を数えるにすぎないが、坏身・高坏・壺・甕・鼈等の器種が認められた。量的には甕の体部破片（第12図他）が30点で最も多く、坏身2点（第9図21、第12図59）、高坏1点（第11図42）、その他鼈1点等と僅少である。

坏身はSK21土壙内出土例が復元実測を通して形態の窺える唯一のもので、大振りで偏平、口縁部が幾分長めに内傾する等の特徴がある。技法的には回転ヘラケズリ調整が底面域にほぼ限定されて施され、形態も含めてMT15相当と考えられる。焼成は硬調で胎土緻密であり、色調は明青灰色を呈す。高坏はSD14の覆土中から脚部が、約20m程離れた第1次調査区のSD98溝跡から坏部が各々出土して接合したものである。坏の下半に櫛描波状文が施され、脚部は三方に透かしが穿たれた長脚となる（第11図42）。鼈・RP17はSK21土壙の底面近くから出土したほぼ完形の優品で、頸部に細かい工具による櫛描波状文が幅広で密に施され、体部中央からやや上部に円孔が穿たれている。なお、口縁部から頸部にかけて漆による補修の痕跡が明瞭に認められ、さらに円孔部の内外、および体壁の切口等でも注口の接着・固定の目的から施されたと考えられる漆の付着が観察された（第9図23）。その他の遺物では滑石製・土製の紡錘車各1点（第11図48、第12図67）、ミニチア土器1点（第10図32）、近世以降にかかる陶磁器や古銭等若干がある。

6 まとめ

紙数の都合から遺構・遺物の概括的記述に終始し、まとまりのないものとなった。従って、全体のまとめを最後に譲り、以下では前項で取り上げた遺物に限って述べる事とする。

土師器各種は遺構内での在り方から一括出土ないし共伴関係にあると把握できるものがあり、以下に列記して共伴や組成について瞥見しておく。ST4では坏A V・VI・VII類が出土し、覆土・床面の違い等出土状態からVII類がV・VI類に先行すると認識できた。SK21では坏A I・II b・IV・V類、高坏B I・III類、鉢C II類、甕D I a・II a・II b・III a類、瓶E I類その他、MT15併行の須恵器坏や鼈が層位の一括と捉えられ、今次調査の中では最も良好な共伴・組成関係を窺えた。またSX27では、坏A II・V・VI・VIII類、鉢C I類、瓶E II類等のまとまりを得ている。その他、器種・量的に少ないながら、SK23で坏A VII・VIII類、鉢C I類、甕D III a類、及び小形土器、SD24では坏A III類、高坏B II類、鉢C II類、甕D I a類他が共伴している。これらの年代は須恵器等の様相から、MT15を上限に考えることができ、SK21に限れば6世紀第2四半期頃の所産と推察される。

4) 田辺昭三 1966「陶邑古窯跡群I」平安学園考古クラブ

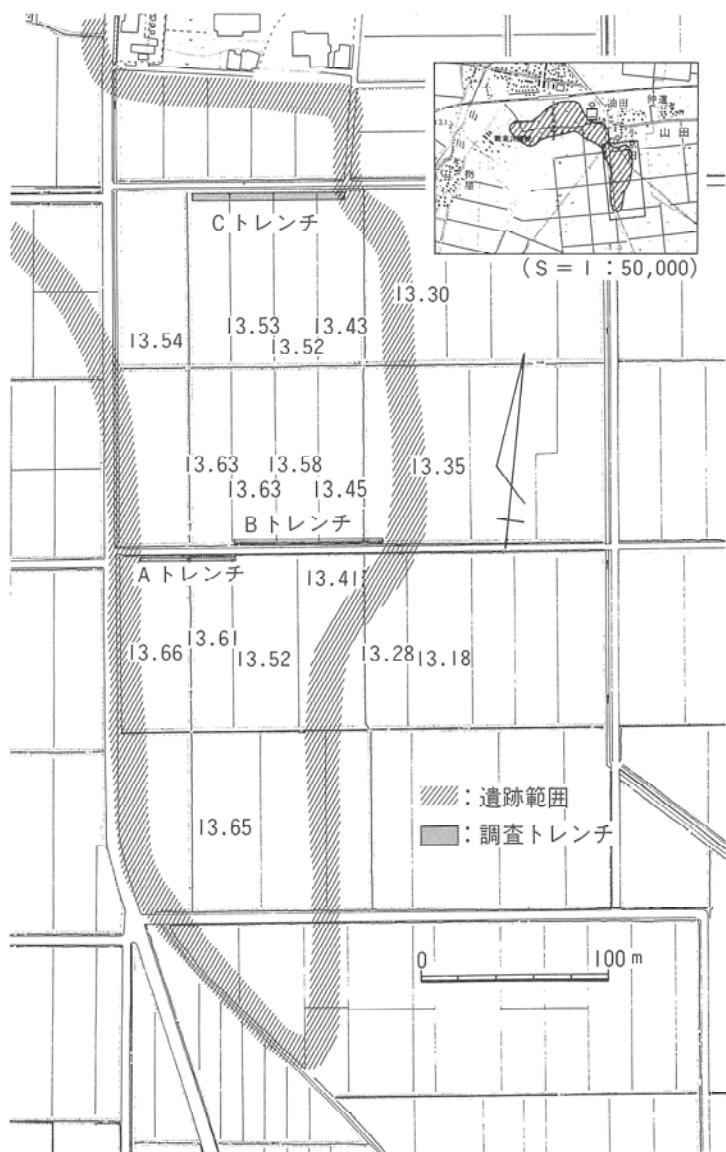
IV 山田遺跡

I 調査の概要

昭和62年度の分布調査では、東西・南北共に 800mに及び細長い三ヶ月形の遺跡範囲が確認された。本年度の県営ほ場整備事業に係る部分は県道大山一湯田川線以東の南北 500m、東西 150mの部分で、主に平安時代に帰属する遺構・遺物が検出された区域である。以前より良く知られるところの古墳時代の遺物を出土する地点は、本年度調査の対象となる区域より西方に位置している。

調査は遺構面までの深度と施工方法から現状での保存が可能と考えられたため、破壊の確定的な排水路及びパイプライン部分のみを対象としている。設定したトレントはいずれも東西方向に長い3本で、南からA・B・Cと命名した。Aトレントは幅 2.5m長さ50m、Bトレントは幅 3 m長さ75m、Cトレントは幅 4 m長さ80mで、調査面積は合計 670m²である。

8月29日より開始した調査は、重機械による表土掘削後手作業による面整理を経て、9月5日（第2週）より遺構の精査作業に入った。9月7日より遺構精査と平行して平面図作成・写真撮影等の記録作業を行い、9月9日迄にすべての精査・記録作業を終了、現場の後片付け、器材等の徹収を行い、調査を終了した。



第13図 調査概要図

2 遺跡の層序

トレンチ壁によって観察できる層序は基本的に3層から構成される。第I層は砂の混入する黒褐色粘土、第II層は黒に近い灰色粘土、第III層はグライ化した灰色の粘土質砂またはシルトで、III層上面で遺構が検出された。土色や土質は必ずしも一様ではなく、特にIII層はグライ化の影響から色相の変化が顕著に見られた。Cトレンチでは他と比較してグライ化による影響は少なく、明色で黄色みを帶びているが、Bトレンチの東側ではグライ化の影響が大きく、青灰色に近い色相を呈している。これはCトレンチやBトレンチ西側がBトレンチ東側に比して高燥であり、Bトレンチ東側では既に遺跡の末端部分にかかっている為と予想され、遺構の分布密度の点からも指的である。また、Cトレンチにおいて古墳時代文化層との関連から、幅50cm、表土からの深さ約1mのサブトレンチを設定し深掘りを実施したが、より下位の文化層は確認できなかった。

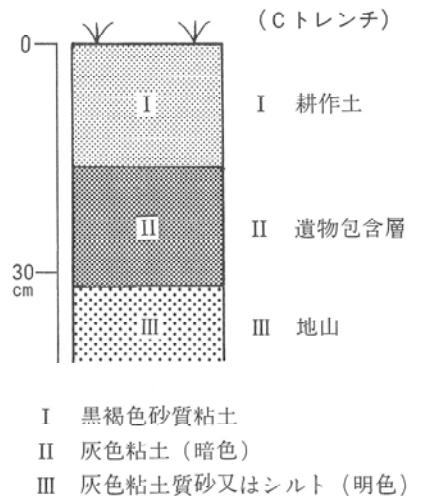
3 遺構・遺物の分布

検出された遺構は柱穴様ピット、溝跡、土壌様の落ち込み等があり、すべてが平安時代を中心とする歴史時代に帰属するものである。古墳時代の遺物も出土しているが、ほとんどが包含層からの出土であり、古墳時代の遺物を含む遺構は検出されていない。

柱穴様ピットは62基を数え、A～C各トレンチにおいて検出されている。しかしそのすべてが組合せ不可能なもので、掘立て柱建物跡等の柱穴列は検出されていない。溝跡はBトレンチから4条、Cトレンチから大小合せて19条が検出されている。そのほとんどは南北方向に延びる細く浅い畝状のものであり、遺物を含むものはCトレンチのSD15・16・17の3条のみである。土壌状の落ち込みはAトレンチから2基、Bトレンチから4基検出されているが、遺物の出土はほとんどなく、性格は不明である。

遺構分布の点では、Cトレンチからは、トレンチ全体からほぼ満遍なく遺構が検出されているのに対し、Bトレンチではトレンチ西端、Aトレンチではトレンチ東半に限られている。これは、南側に細い遺跡範囲の末端部分にさしかかり、遺跡範囲を外れてきている為と考えられる。

遺物の出土数は整理箱に2箱弱であるが、大部分はCトレンチより出土しており、さらにその半数以上はSD15・16・17の3条の溝跡より出土している。



第14図 土層柱状図

第15図 遺構配置図

4 遺構

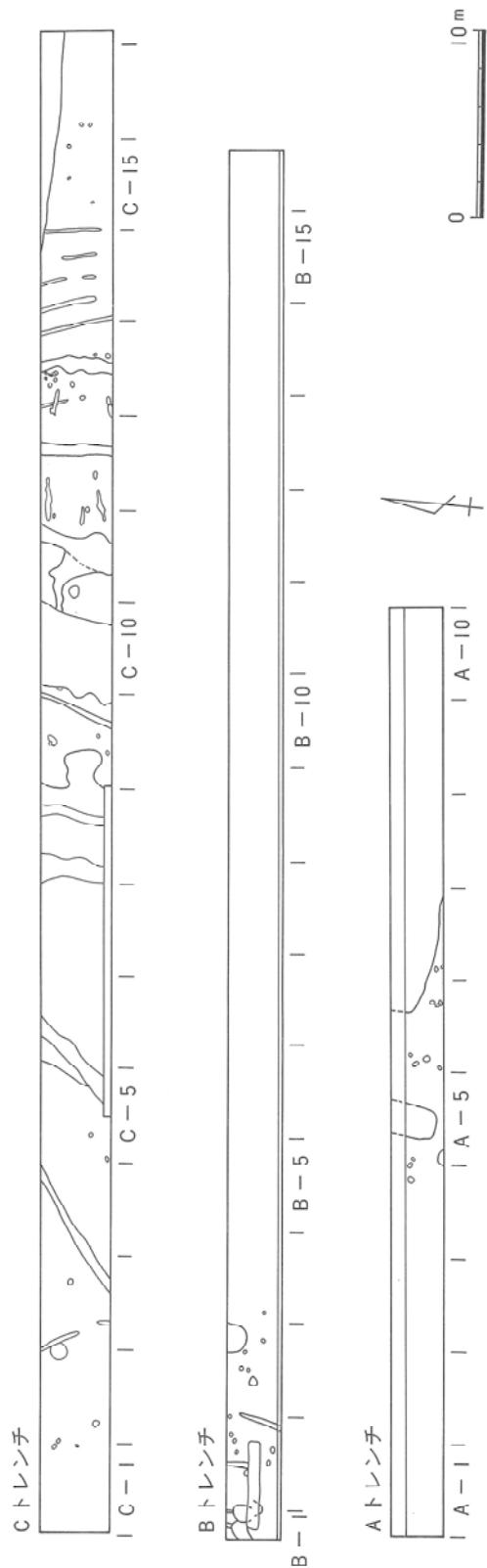
Aトレンチ

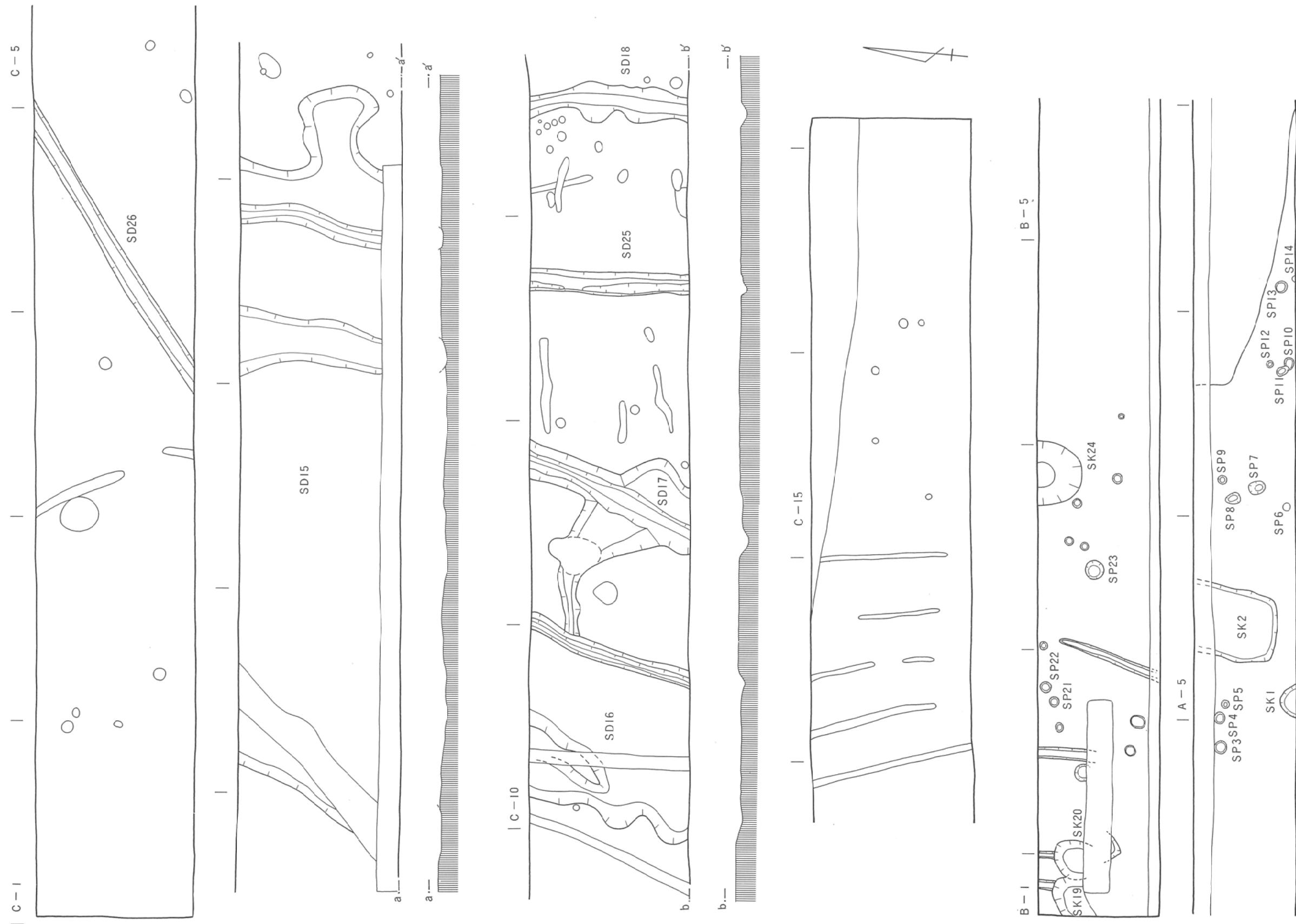
Aトレンチは3本のトレンチ中最も南側に位置する。幅2.5m、長さ50mで、調査面積は125m²である。地山の状態は概ね良好であるが、東端部分が後世の搅乱により遺構の検出が不可能であった。

検出された遺構は、柱穴様ピット12基、土壌様の落ち込み2基の合計14基である。ピットは直径20~30cm程度の円形を呈し、深さは15~30cmを測る。アタリ、掘り方共に比較的明瞭なものが多いため、組み合せ可能なものはなかった。遺物はS P 3の掘り方から、あかやき土器の甕口縁部破片が1点出土している。

2基検出された土壌様の落ち込みのうち、SK1はトレンチ南壁にかかり、約2分の1が未検出である。形状は直径80cm程度の円形と考えられる。深さは約10cmと浅く、深い塊若しくは皿状を呈する。SK2はトレンチ北壁にかかり、北側が不明であるが、東西1.2m、南北1.7mが検出され、長方形を呈すると推定される。底面は浅い皿状で、深さは最深部でも15cm程である。これら2基からは遺物の出土はほとんどなかった。

Aトレンチでは遺構は東側半分に集中し、Bトレンチとの関連からより東方へ拡がりを持つと推定される。反面、トレンチの西側半分からは遺構の検出はなく、遺物もほとんど出土していない事から、遺跡の西辺域に位置していると推定される。





B レンチ

農道を挟んでA レンチの北側に位置する。幅3 m、長さ75 mを測り、調査面積は 225 m²である。遺構が検出されたのはレンチの西端部分に限られ、東側では遺構・遺物共に検出されていないことから、南側に細い遺跡範囲の東辺に位置していると推定される。また、レンチ西端部に幅70cm、長さ 4.5 m 程の深い搅乱があり、遺構の検出が一部困難であった。

検出された遺構は、柱穴様のピット13基、溝跡4条、土壙4基を数える。ピットは15~20cmの比較的小さなものと、直径30cm前後で深さも約30cmを測るやや大きめのものがあるが、いずれも組合せは不可能であった。溝跡はいずれも南北方向の細く浅い畝状のものである。土壙はいずれも全容が検出されておらず、遺物の出土もほとんど皆無であることから、性格は不明である。

C レンチ

C レンチは最も北に位置し、幅4 m、長さ80 mで、調査面積は 320m²である。遺構検出面となる地山の状態は良好で、遺構・遺物共に最も多く検出されている。

検出された遺構は、ピット32基、溝跡19条を数える。ピットは10~15cmの小径のものが多数を占め、組合せ可能なものはない。溝跡はほとんどが南北方向のもので、3つのタイプに分類できる。1つは細く浅い畝状のもので、途中で消失しているものも多い。2つめは幅50cm前後、深さ15cm前後を測るもので、前者に比してやや深く掘込みも明瞭であるが、遺物の出土はほとんど皆無である。3つめはやや幅広く遺物を含む一群である。これらはレンチ中央部に集中し、西から S D 15・16・17と命名した。以下若干の説明を加える。

S D 15：レンチのほぼ中央部C - 5 ~ C - 9において検出された。幅は15 mを測るが、深さは10~20cmと比較的浅く、遺物は若干量が出土している。内部を3条の溝跡に切られている。

S D 16：S D 15の東側、C - 9 ~ C - 10において検出された。幅4 m強を測る。深さは概ね10cm前後であるが、底面は凹凸が激しく、最深部では約30cmを測る。東側を平行する細い溝に切られている。遺物の出土は比較的多い。

S D 17：S D 16の東側、C - 10 ~ C - 11において検出された。2条の溝跡の重複と考えられる。1条は幅80cm、深さ20~30cmを測り、ほぼ南北方向に走る。もう1条は南南東ー北北西方向に走る。形は不定で、幅は最大で2 m、北西部では30cmと細くなっている。中央部北辺に張出しがあり、周囲に炭化物の拡がりが確認された。深さは10cm程度と前者よりも浅い。堆積土の状況から、前者が後者を切っていると考えられる。遺物の出土数は比較的多い。

5 遺 物

遺物は A～C トレンチの包含層や、C トレンチの溝跡を中心として検出されたが、調査範囲が限定されたこと等から総体的に僅少であった。出土遺物の内訳は須恵器が 248点、土師器甕等が10点（古墳時代に帰属）、あかやき土器の甕・壠類他 525点、その他の陶磁器類12点であり、総数で 800点弱を数える。以下では、これらの中から比較的状態の良い資料を例示して取り上げ、種別・器種毎の概略を記す。

a) 須恵器

須恵器は蓋、壺、壺、甕等の器種が認められ蓋、壺類が比較的多く検出された。これらは主に C トレンチの S D 15・17 等の溝跡にかかわって出土したものが大半で、壺では底部の切り離しがヘラ切りに施る（調整はナデのみでケズリは認められない。）。底径が口径の約 6 割方を占めて幾分大きめである。底部と体部との境が明瞭なものが多い。無台のものが主体的である。等の特徴が上げられる（第17図 2・12・13・16・17）。なお、底部にやや小さな書体で「井力」と墨書きされた壺が S D 15 の覆土から出土している。

蓋は法量的に上記壺に見合うもので、第17図 5 で口径 182mm、鉢を含めた高さ 41mm を各測る。調整は切り離し後のケズリ整形が顕著でなく、最終的にナデ仕上げとするものが殆どである。また、壺、甕類での良好な資料は少ないが、甕のタタキ手法で格子目風の平行タタキ、アテで青海波文および平行アテ等が認められ、アテ痕では同心円文系の青海波文類が多数を占めた。

b) あかやき土器

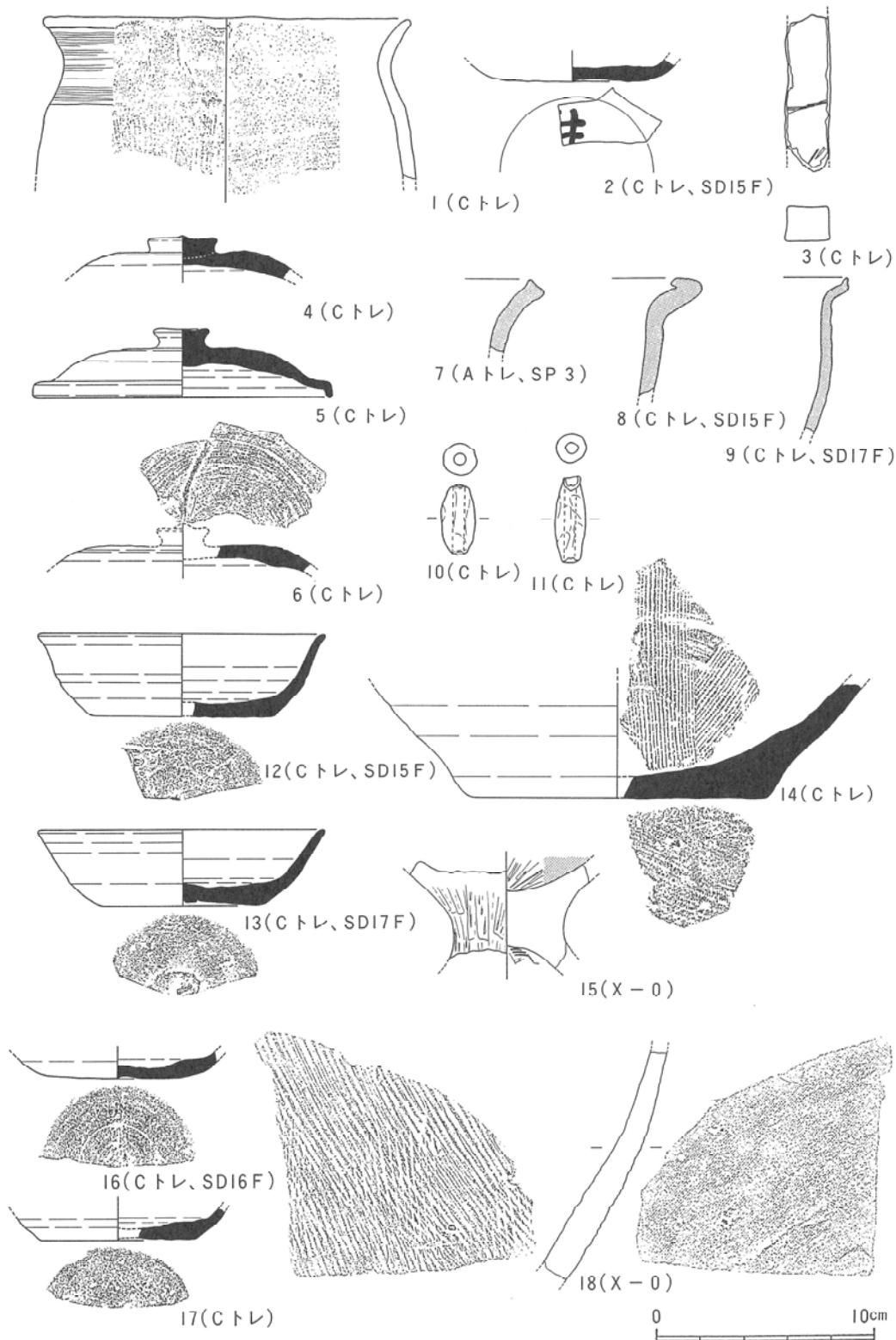
全体に資料が少なく、また細片となった二次的遺物が大半と判断出来ることから、細部についての記述を割愛し例示資料その他若干に限って記すに止める。

器種的には煮沸形態の甕・壠等が主体を占め、壺類他の供膳形態は殆ど組成されない。しかし、量的に多い壠・甕類でも形状の窺えるものが殆どなく、僅かに口縁部形態を第17 図 7・8 等の資料から窺える程度である。この中で壠（8）の口縁部形態は庄内地域の遺跡ではこれまであまり見ることのなかった類型と思われ、北陸的視野⁵⁾から理解すべき資料と注目される。例示資料を欠くが体部等の調整では平行タタキ・平行アテ、およびヘラケズリの施されるものが大半である。なお、壠・甕類の他に少量ながら中・小型で平底になると考えられる鉢が若干認められ、調整はロクロナデのみと観察される（第17図 9）。

c) 土師器、その他

内黒の高壺と甕等が C トレンチ等に認められたが、いずれも古墳時代後期に帰属すると考えられるものである。付近に当該期を主体とする地点の存在が以前から知られており、流入と判断された。その他、土錘、珠洲系の擂鉢・甕等の中世陶器が若干出土している。

5) 田島明人 1986 「IV 考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター



第17図 出土遺物

6 まとめ

調査は用排水路部分に限ったトレンチ方式で実施した。調査面積は遺跡域にかかる部分の約 670m²である。検出された遺構の内訳は溝跡23条、土壙6基、柱穴57基等であり、位置的にはAトレンチの中央部分、Bトレンチの西辺、Cトレンチの東半部分等に偏在して認められた。内容はAトレンチで土壙と柱穴、Bトレンチで土壙、溝跡、柱穴、Cトレンチで大小の溝跡群と柱穴である。これらの平面的関係はA・BトレンチとCトレンチ間で約 200m 程の隔たりがあるため比較自体に無理があるとも考えられるが、外観的に横一線の分布を示すと捉えられなくもない。例えば、Cトレンチにおける S D 15溝跡の位置とその方向等を中心とした遺構の在り方が窺われ、単なる偶然とのみ考えられない。すなわち、何らかの有機的関連を持って存在した可能性が強いと思われるが、未調査地区を多く残す限られたトレンチ部分からだけの成果ではこれ以上の言及は無意味であろう。

一方、遺構の構築時期は出土遺物からおおよそ平安時代前葉頃と推測できるが、まとまった遺物がCトレンチの溝跡を除けば殆ど希薄であるため詳細は不明である。このように、今次調査により明らかにされたことがらは非常に断片的であり、遺跡内容や性格についてまで検討し得る資料・知見は得られなかった。

なお、助作遺跡ではほ場整備事業に係る水路部分1130m²の調査から部分的ながら住居跡、土壙、溝跡、畝状溝跡等の遺構が検出された。遺物は土師器及び搬入品と考えられる古式須恵器（M T 15併行）若干、その他紡錘車等の土・石製品等があり、須恵器との共伴から時期的に 6 世紀の第二四半期頃を上限とするものが主体（S K 21）と考えられる。下限については必ずしも明確にできないが、A区の S T 9 住居跡で T K 10併行と思われる須恵器坏が土師器他と共に出土している等を根拠とすれば遺構・遺物の時期は 6 世紀後半にかかるまでの時期幅が推定できる。しかし、第 1 次調査分についての整理作業と報告書作成は未了であり、詳細は今の所明らかでない。従って、全体的な遺物の型式学的検討・遺構相互の関係・構築時期等の詳細は後日の課題とし、ここでは遺構の位置関係等の概観から予察的にその性格を述べて終わりとしたい。

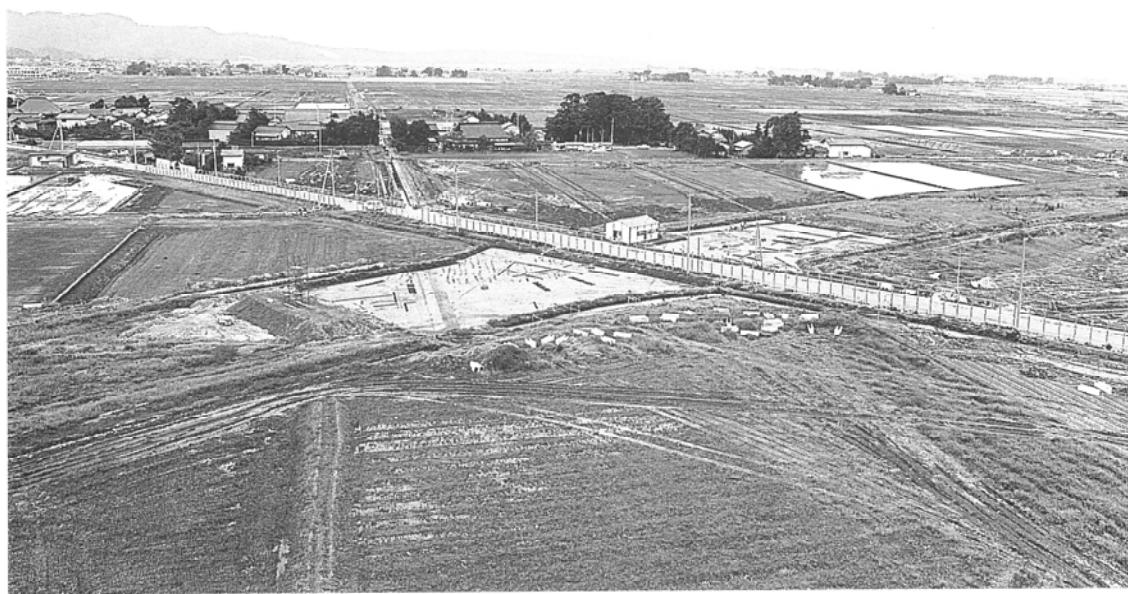
第 1 次・第 2 次調査を通じて検出された遺構はその配置から A 区、B 区にまたがる S D 10・98 大溝を境として大別二群に捉えられ、外観上 3 ~ 4 棟の住居を一単位とする居宅地的な性格が想定される。また、周囲に B 区や H トレンチで顕著に認められた畠地（畝状遺構）を伴っていると見做す事ができ、居住地に園地が備わった集落の単位的まとまりを表すものと考えられた。こうした在り方は、近年群馬県の黒井峰遺跡他で明らかにされた遺構群に共通すると理解され、集落構成を窺う上では注目すべき資料と言えるであろう。

6) 山形県教育委員会 1988 「助作遺跡第 1 次調査説明資料」

図 版
助 作 遺 跡



航空写真



調査区全景(南から)

図版2 助作遺跡



A トレンチ東半(西から)



B トレンチ(西から)



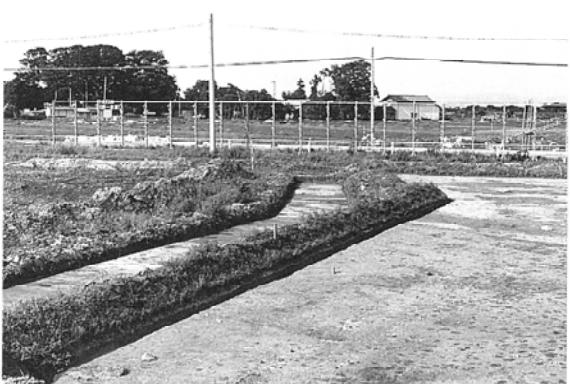
C トレンチ(南から)



D トレンチ(西から)



E トレンチ(北から)



F トレンチ(西南から)



G トレンチ(西から)



H トレンチ(西から)



SK21検出状況(南から)



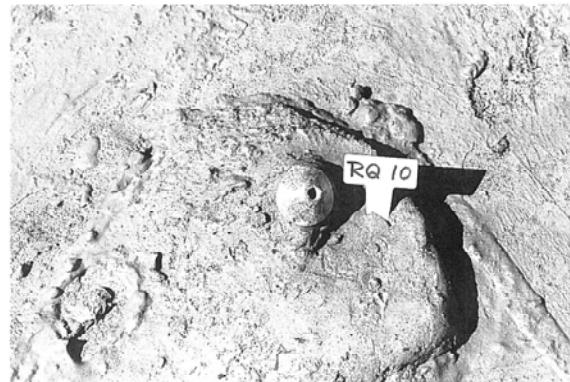
SK21、RPI16・17出土状況



SK21、RQ18~20出土状況



SK25、RQ13・14出土状況



SD24、RQ10出土状況

図版4 助作遺跡



SK23土壌(南から)



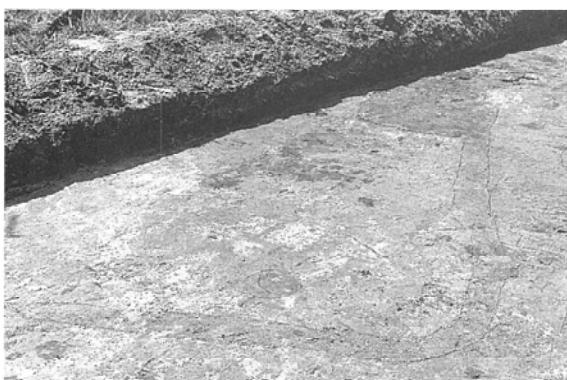
SK25土壌(南から)



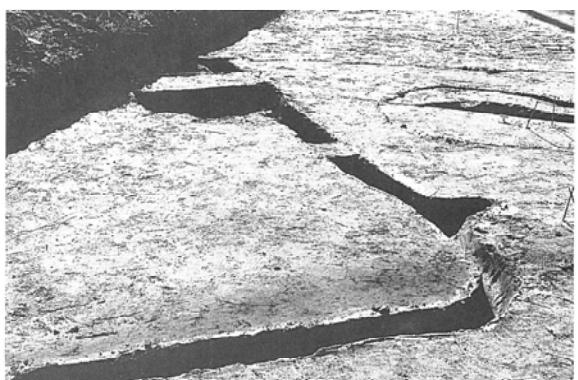
SX27、RP23・24出土状況



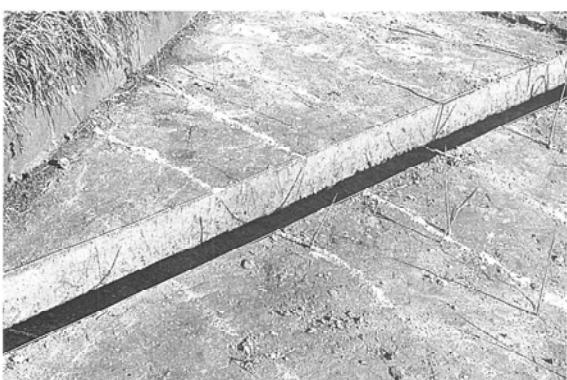
SX20遺物出土状況



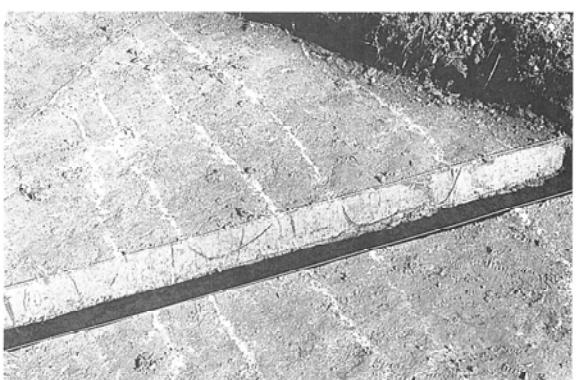
ST8検出状況(北東から)



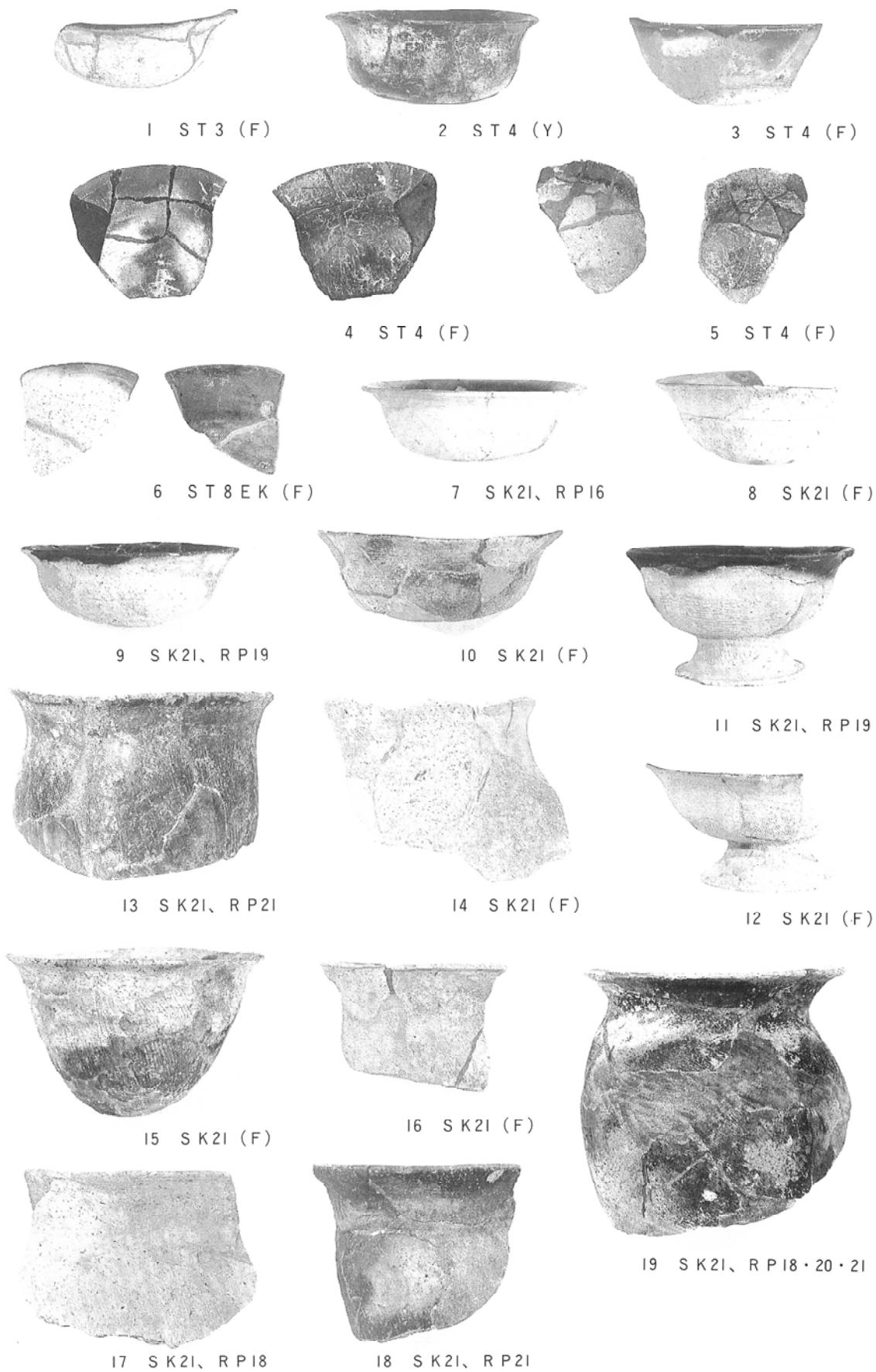
ST8住居跡(北東から)



Hトレンチ畦畔状遺構(1)



Hトレンチ畦畔状遺構(2)



図版 6 助作遺跡



1 SKII (F)



5 SK23, RP13



2 SK21, RP19



3 SK21, RP17



6 SK23 (F)



7 SK23, RP12



9 SK25 (F)



4 SK21



13 SK23



8 SK23, RP13



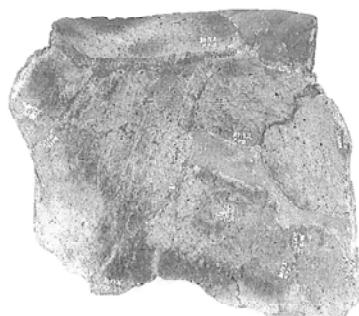
11 SD24, RQ10



10 SK23

12 Fトレーナー (III)

14 SK25 (F)



15 SK23 (F)



16 S62年度分布調査
(SX27近接)



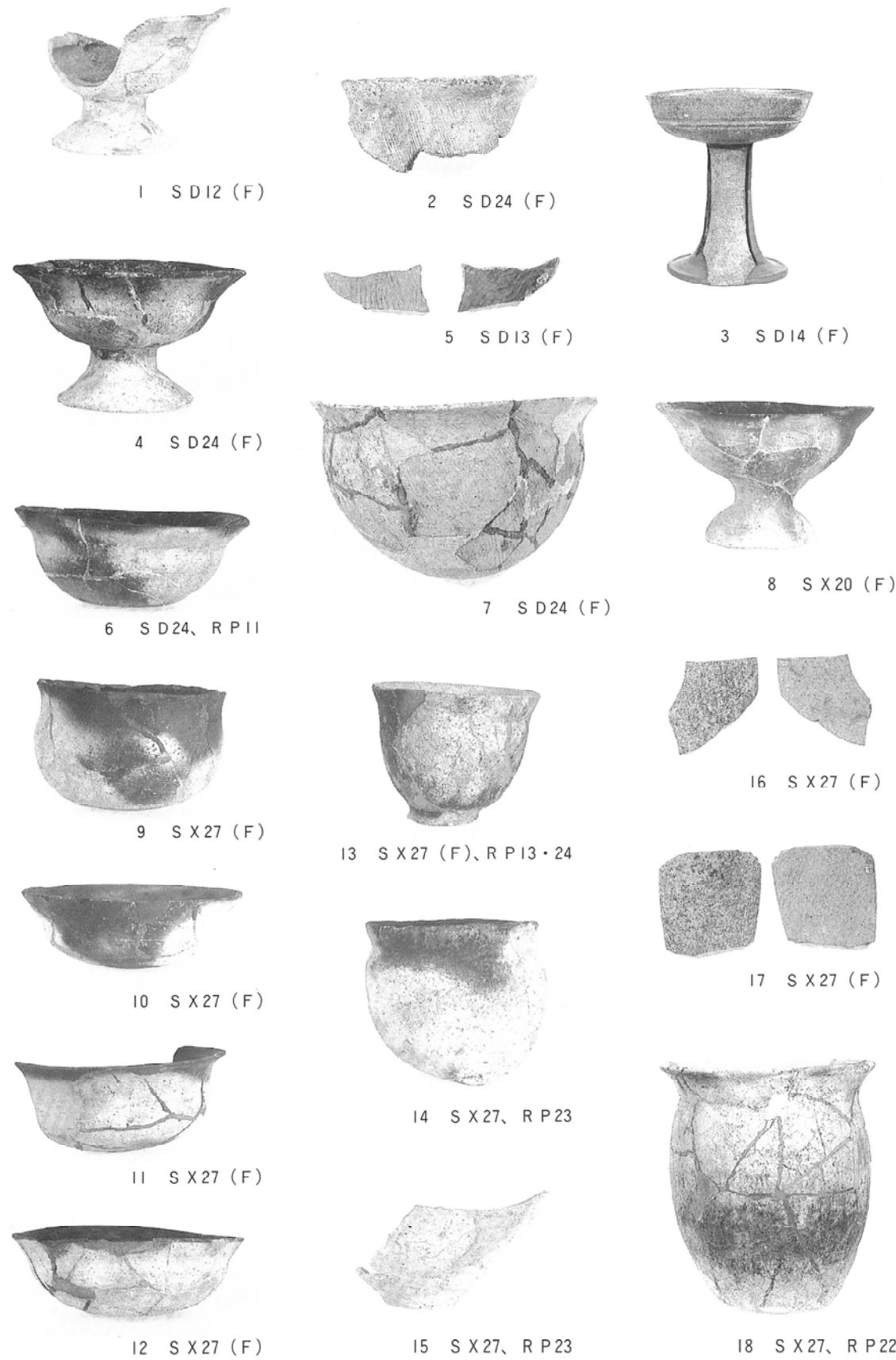
17 SD10 (F)



18 SD10 (F)



19 SD10 (F)



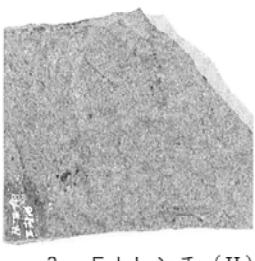
図版 8 助作遺跡



1 C・D トレンチ (II~III)



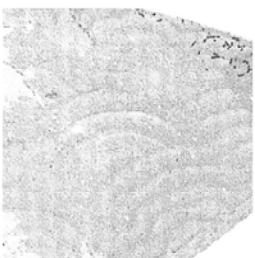
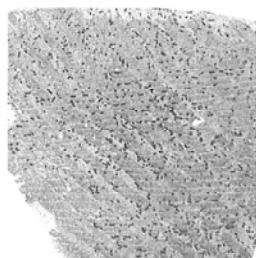
2 C・D トレンチ (II~III)



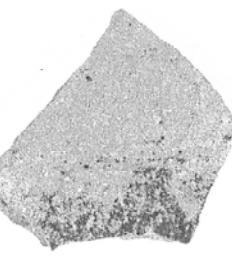
3 F トレンチ (II)



4 C・D トレンチ (II~III)



5 C トレンチ (II)



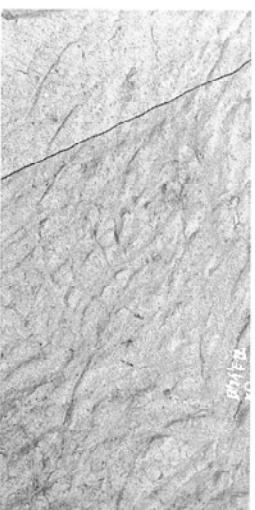
6 H トレンチ (III)



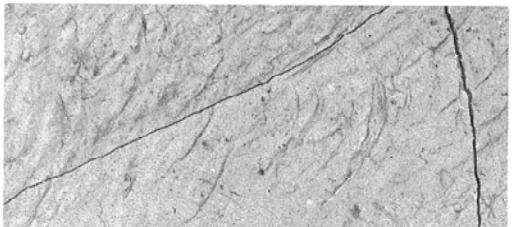
7 C・D トレンチ (II~III)



8 S D24 (F)



9 農道北側表採



10 農道北側表採

図版
山田遺跡



A トレンチ(西から)



遺構検出状況(北西から)



SK2 土壌(北西から)



SP3・4・5(北から)



SP10・11・12(北から)

図版2 山田遺跡



B トレンチ(西から)



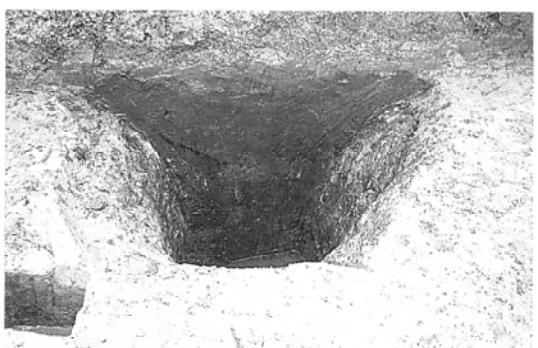
遺構検出状況(東から)



SP21・22(南東から)



SK24土壌(北から)



SK24土壌(南から)



C トレンチ(西から)



遺構検出状況(南東から)



SD17溝跡(南から)



SD18溝跡(南から)



SD19溝跡(南から)

図版 4 山田遺跡



出土遺物(1)



出土遺物(2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第143集

助 作 遺 跡
山 田 遺 跡

発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 山形印刷株式会社